2016年5月18日発行

Voice of Design

Vol. 22-1

日本デザイン機構
Japan Institute of Design

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F 〒171-0033
San Ai Bldg. 2F 3-30-14 Takada Toshima-ku Tokyo 171-0033 Japan
Phone: 03-5958-2155 Fax: 03-5958-2156
http: //www.voice-of-design.com E-mail:info_jd@voice-of-design.com

榮久庵憲司で切る!

ソーシャルデザインの未来を拓く

榮久庵憲司 × Social design × Future

特集 Voice of Design Forum 詳報
オピニオンズ 榮久庵憲司で切る！
——ソーシャルデザインの未来を拓く

目次

開会挨拶 水野誠一 …… 2
モデレーターガイド 伊坂正人 …… 3
プレゼンター発言 …… 4
GK & RIA, 1952 天内大樹
温故知新に学ぶ日本の「感性」と関係のデザイン 森田昌嗣
「世界はひとつではない」——デザインの真剣 山田晃三
形あるものの総合的なデザインの行き着くところはソーシャルデザイン 車戸城二
ディスカション …… 16

Special Issue Voice of Design Forum
Opinions: Critiquing Design from Kenji Ekuan's Viewpoint
- Exploring the Future of Social Design

Contents

Opening Address: Seiichi MIZUNO …… 2
Moderator's Guide for Discussion: Masato ISAKA …… 3
Presentations by Panelists …… 4
GK & RIA, 1952. Daiki AMANAI
Japanese "Kansei"and Design of Relations learning from the Japanese concept of treasuring the past and learning from the present. Yoshitsugu MORITA
The World is not One ? the true role of designers. Imagination is necessary to be able to see different worlds. Kozo YAMADA
Business profits are indispensably related to social sustainability. Joji KURUMADO
Discussion …… 16

特集　Voice of Design Forum 詳報

オピニオンズ
「榮久庵憲司で切る！――ソーシャルデザインの未来を拓く」

日時 2015年6月19日（金）
主催 日本デザイン機構　　会場 日仏会館（東京都渋谷区）

榮久庵憲司日本デザイン機構会長が2015年２月に逝去された。故人は、戦後の日本、および世界のデザインを牽引してきた人であり、その志を何らかのかたちで引き継ぐことが当会の課題となっている。

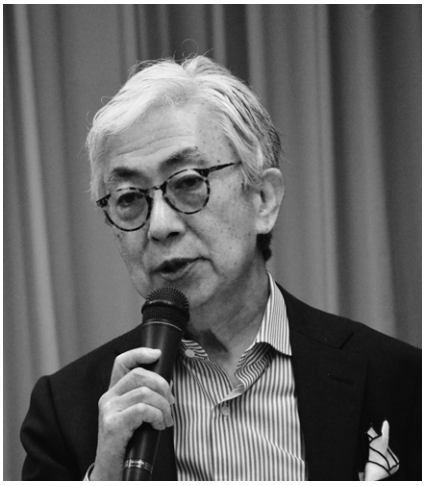
榮久庵憲司会長は、専門を超えたグローバルな連携やデザインの価値を高めるためのさまざまな運動を展開してきた。その認識のもと、故人の単なる追悼ではなく、故人が追求してきた運動を軸にこれまでのデザインを総括し、当会が発足以来テーマにしてきたソーシャルデザインの未来像を討議するフォーラムを開催した。本号でその内容を詳報する。

開会挨拶

水野誠一
日本デザイン機構会長、ソシアルマーケッター

榮久庵さんが日本デザイン機構を立ち上げるときに、デザインの世界にいなかった私に、参加するように誘ってくださいました。そのとき私は、デザインの概念を狭い意味でのデザイン、例えば、グラフィックデザインやプロダクトデザインということではなく、もっと広い、例えば社会をデザインしていく、国をデザインしていく、あるいは政治をデザインしていくというような「広義のデザイン」で捉えていいですかと問いかけました。「もちろん結構だ」ということで、ソーシャルデザイン、つまり社会をデザインしていくという概念を持ち出したのが、ちょうど20年前だったわけです。そういう考え方から我々は、クルマ社会をデザインする、水をデザインする、防災とデザインなど、さまざまな社会的テーマでデザインを捉えてきました。

21世紀は、ますます混迷する時代になっていき、環境問題、資源問題、国際紛争など、さまざまな難問が出てきています。日本では、未だ地震が継続し、火山も噴火し続けているというような環境の中で、今まで、我々がテーマとしてきたソーシャルデザインが、ますます重要な意味を持ってきたことを実感しています。こういう時代に、この日本デザイン機構の存在感というものもまた大いに示していけたらいいと。そしてそれが榮久庵憲司という偉大な先駆者の遺志を継ぐことになるのではないか。そう考え、今日の会を開催します。お時間が許す限り、会場にお集まりの皆さんからもいろいろ活発な意見や叱咤激励を頂戴したいと思っております。



Special Issue
Voice of Design Forum
Opinions: Critiquing Design from Kenji Ekuan's Viewpoint - Exploring the Future of Social Design

Purpose of the Forum

Chairperson of Japan Institute of Design (JD) Kenji Ekuan passed away in February 2015. He was at the forefront of design in postwar Japan and the world until his death. We would like to review design in the past along the axes of global partnership across specialties and movements to enhance the social value of design that Ekuan spent his life promoting. It makes us envisage the future of social design that JD has been studying since its inception.

Opening Address

Seiichi MIZUNO, Chairperson of JD, Social Marketer

When Mr. Ekuan was in the process of establishing JD, he invited me to join the group. As I was not specialized in design, I asked him "Can I understand design in a broader sense, for example, designing a society, a country, or politics?" He said, "Certainly, of course." Hence, the concept of social design was brought forth. This was twenty years ago. The world in the 21st century is becoming increasingly chaotic, with environmental issues, resource problems, and national as well as international disputes. In Japan, earthquakes continue to occur and volcanoes keep erupting. Under such circumstances, social design is becoming more important and the Japan Institute of Design should more positively display its presence. Doing so would intend to carry on the will of our great forerunner Kenji Ekuan.

モデレーターガイド

伊坂正人　日本デザイン機構理事長

今日の進め方としては四人のプレゼンターから約８分間のお話をいただいて、それをもとに皆さんと議論を深めていきたいと思っています。

テーマは「榮久庵憲司で切る――ソーシャルデザインの未来を拓く」です。その意味は、榮久庵憲司を回想するというよりも、彼が示した幾つかの話やキーワードをベースにしながら、この会が標榜しているソーシャルデザインを少し深掘りしていきたいということです。そして「ソーシャルデザインの未来像」を皆さんとの議論の中で見つけ、それを支えに日本デザイン機構のプロジェクトをつくっていきたいと思っています。どうぞ闊達な議論をいただきたいと思います。

はじめに、私からいくつかのキーワードを挙げてみます。それは榮久庵さんがデザインについて示した言葉です。

一つは「モノの民主化」。いろいろなインタビュー記事や彼が書いた本などに、戦後焼け野原だった広島、そこから「モノ」の世界を復興したい、それを遍く世界の人に行き渡らせたい、そういう「モノの民主化」というキーワードを出されています。

そういう「モノ」や「モノ」がつくりだす世界、人工物の世界に関して二つ目のキーワード「道具」という概念を持ち出してきています。生活の道に具わりしものという言い方をしています。これを探求する団体として、ここにも何名か来ていますが道具学会という会を榮久庵さんのリーダーシップでつくっています。そういう道具という概念を作り出してその「モノの世界」というものを捉えていこう、と。

また、近代化の流れの中であらゆる専門が細分化してしまった。そういう細分化した状況の中で、あらためて社会の問題を捉えていくと一つの専門だけでは解決できなくなってしまっている。そこで、デザインの分野においても、いろいろな専門をクロスオーバーさせるような広がりをつくっていきたい、と。それが三つ目のキーワード「ソーシャルデザイン」です。当会はそれを展開することも標榜してきております。

さらに榮久庵さんは、デザインというものは常に新たな課題をつくりあげて、それを提案していく行為だと言われていました。新たな課題というのは、ある種の問題性をもたせないと社会に理解が得られない。社会的理解を得るという「運動」としての側面を持っている。そういう運動を一つのプロジェクトにし「事業」化していく。この「事業」を実体化したときに実体化したこと自身がどういう価値を持っているのか、社会的に検証する作業がいるのではないか。それを「研究」とか「学問」という言葉に置き換えています。この「事業・運動・学問」を常に回転させながら、デザインの質というものを高め、結果として質の高いモノの世界というものが、遍く世界の人々に行き渡るのだということを論じられていたわけです。これが四つ目のキーワードです。

日本デザイン機構はある種の運動体です。それもソーシャルデザインという切り口から、いろいろな専門が携わって一つの課題発見・解決を図っていく、そういう運動体でありたいということが発足当時からありました。

そういう運動体として標榜してきたソーシャルデザインというものを冒頭に申し上げたように深掘りしながら、榮久庵さんのキーワードをベースにしながらその意味を発見できればと思っております。今日は四人のプレゼンターから意見をいただきまして、それを引きがねに議論を展開していきたいと考えております。

Moderator's Guide for Discussion

Masato ISAKA, President of JD

The theme for this meeting is "Critiquing Design from Kenji Ekuan's Viewpoint - Exploring the Future of Social Design." Instead of merely recalling Kenji Ekuan's achievements, we would like to draw a picture of the future of social design through our discussions.

To begin, I would like to present some keywords that Ekuan often used when speaking on design.

1) Democratization of things. Upon seeing the devastation in Hiroshima, he wanted to revitalize the world of things and also to expand it globally. He expressed it as "democratization of things."
2) Concept of "Dougu." He conceived the meaning of this Japanese word to cover all kinds of things to serve people's living. He also created Douguology, the study of dougu.
3) Concept of "Social Design." Social problems can hardly be solved from one specific specialty in this segmented society, and such is the case in the world of design, requiring crossing over the borders.
4) Movement, Project (or Business) and Study. He required the design to propose new agenda continuously to obtain people's understanding: this movement connects to the business projects. And it in turn requires the establishment of a social value: this process is study. This rotation of three process improve qualities of design to approach globally.

The Japan Institute of Design is a movement by people from various fields to discover problems, to find solutions and to reach the society. Our panelists will present their viewpoints, and we would like to discuss the future picture of social design.

プレゼンター発言

GK & RIA, 1952

天内大樹 静岡文化芸術大学デザイン学部講師

榮久庵さんが主宰されていたGKに関しては、もちろん皆さんの方がご存知かと思います。私は、多分この会場で二番目か三番目くらいに若いかと思いますが、得意な領域は建築ですので、そこに同時代の建築をいわば引出しにして重ねてみようと思っています。

建築設計のRIAは、今でも株式会社として続いている組織ですが、GKと同じ時期に発足しています。GKはご存知の通り小池岩太郎先生、藝大の当時助教授をなさっていた方の下に集まった榮久庵さんを含めた四人の方々で始まった。はじめは学生コンペなどをやっていたところから始まって、次第に企業の仕事を引き受けるようになって今に至る。今に至るまで非常に長いわけですが、そういう発足の仕方、始まり方をしているわけです。

GKの場合は小池先生は途中からいわば身を引いて榮久庵先生たちにお任せするかたちで進んでいくわけですが、一方でRIAに関しては山口文象という建築家がいます。戦前から活躍した建築家で、政治的な活動としても左翼としての建築思想を進めていて、山口文象の周りにいた人たち、創宇社建築会のメンバーには、共産党、戦前の治安維持法下ですので地下共産党の運動をやっていた人たちもいます。そのため結構、筋金入りの左翼というふうに思われてきた山口文象という建築家ですが、しかし政治的な立場というのと同等以上にデザインの力に惚れ込んで集まってきた若い人たち、植田さん、三輪さん、近藤さん、この三人から始まったのがRIAです。建築綜合研究所という日本語訳があったと思うのですが、Research Institute of Architectureの頭文字をとってRIAです。途中から株式会社になって続いています。

GK最初期のメンバー。右から小池岩太郎助教授、柴田献一氏、榮久庵憲司氏、岩崎信治氏、伊東治次氏と建築家の福田良一氏（東京駅前広場計画、1953年。画像提供：GKデザイングループ）

Members of GK in its initial period. From right: Associate Professor Iwatato Koike, Ken'ichi Shibata, Kenji Ekuan, Shinji Iwasaki, Harutsugu Ito and Ryoichi Fukuda of the architect. (Tokyo Station Plaza Project 1953. photo: GK Design Group)

それぞれGKとRIAのボス、それぞれ同じくらいの歳の写真を持ってきました。RIAがどういうことを考えていた組織かというと、実は、山口文象本人から説明できることなのですが、芸術、それから社会、この二つの極――今は芸術と社会が必ずしも対立するものだと固定的に考える必要はないのですが――、少なくとも当時の文脈においては、芸術とは個人の署名が入った作品を発表して名作を目指すという姿であり、社会的な立場ではより匿名の建築がまちの中に充填されていって、その中で匿名の人の作品が匿名の人たちの生活をいわば底上げしていくべきだ、そういうような両極の視点がありました。それに引き裂かれていたのが山口文象でありRIAであると。少なくとも発足当時はそうであったろうと思うわけです。

実は、山口文象個人の建築設計事務所は1949年、戦後すぐの時に解散して

Presentations by Panelists
GK & RIA, 1952
Daiki AMANAI,
Lecturer, Faculty of Design, Shizuoka University of Art and Culture

Specializing in architecture, I would like to refer to an architectural design firm, RIA, to highlight GK as they were established around the same year. GK began with Ekuan and three other students as a study group under associate professor Iwataro Koike at the National University of Arts and Music (now Tokyo University of the Arts). Prof. Koike, later withdrew from the group and GK continued its work as a professional design firm.
At the Research Institute of Architecture (RIA), there was Bunzo Yamaguchi who had been a well-known architect since prewar days. Politically, he was a leftist and was promoting a leftist architectural ideology. He had leftist colleagues, some of whom were underground communists in the prewar period under the Maintenance of the Public Order Act. But apart from his political ideology, young architects such as Ueda, Miwa and Kondo were strongly attracted to Yamaguchi's design ability and together they jointly founded the architectural design office, RIA.
In those days, it was generally considered that art activities were intended to publish works with individual creators' names while architectural activities were aimed at filling a city with buildings by anonymous designers to upgrade the life of anonymous citizens. Yamaguchi and the rest of the team at RIA were torn between the conflicting notions of art and society.
After several years of struggling through the postwar situation, Yamaguchi+RIA regained their business through members' relations in the art community.

山口文象氏（RIA「山口文象研究会」ウェブページより）
Bunzo Yamaguchi (RIA "Bunzo Yamaguchi Research Institute" from its web page

小池岩太郎氏（広島パブリックカラー研究会 Hiroshima Public Color Institute ウェブページより）
Iwataro Koike ("Hiroshima Public Color Institute" web page)

います。それは直接的には、単に仕事がなかったからです。占領軍の仕事も、バー、キャバレーの類、水商売の類の建物も引き受けたくないと山口は考えていた。当時、それ以外に建築の仕事はほとんどありませんでしたので、結果、かなり厳しい状況に追い込まれました。生活の上でも厳しい状況だったのですが、藤山愛一郎という財閥出身でのちに外務大臣を務める人物から大日本製糖工場の依頼を受けることができた。この人脈はもともと芸術サークルに出入りしていた頃からのもので、新制作派協会にも建築部というものをつくって積極的に関与していったということですから、山口およびRIAは芸術の方から立ち上がった、あるいは立ち直ったわけです。中には朝鮮大学校という仕事など、どうやって完遂したか今の時点からわかりにくいような、そういうような仕事もやっています。

そういう建築と社会の両極に引き裂かれたような山口のあり方というのがあるのですけれども、似たような関心というのが当時広く見られたようなのですね。先行例で言うとバウハウスをやっていたグロピウスがアメリカに亡命しましたが、その時にTAC（The Architects Collaborative）といって、若手七人を集めて、工業化社会の中でより匿名的な組織の中で建築設計を考えていきたいということをやっていました。RIAもかなりTACに影響を受けていたようです。それから池辺陽さんの学生たちも連合設計社を同じ東大の中でやろうとしていたことが知られています。池辺さんも新制作協会に関与していますから、工業生産を通じた社会への貢献と芸術という言葉が必ずしも対立していなかった、あるいは未分化だった時代であることが解ります。

RIAの人たちは、実は、GKのことを結構意識していたようで、近藤さんという方がインタビューに答えている動画がYouTubeにありますが、それを見ているとやはりGK、TAC、池辺さん、そういったものを見ながらRIAの組織のあり方を考えていたということを証言なさっています。いずれにしても何か首領（ドン）がいて、その周りに若手がいて、その若手を通じてドンが建築で社会を変えていく、そういう組織のあり方を考えている中で、例えば事務所の中でスタッフ全員が、山口文象さんを含めてだと思うのですが、コンペをするというようなこともやっていたようです。事務所の中を一つの合議制の社会にしようという試みです。

最近、RIAに関しての本が出たきっかけもあって、僕自身もウェブ上にRIAについて書きました。どういう内容かというと、山口文象は思われているほどゴリゴリの左翼ではなくて、どちらというと芸術というテーマを考えていた人間なのではないか。芸術がどう成り立つのかという、芸術の下部構造みたいなことを考えていた人なのではないか。そういうことを述べた文章です。あまり今まで山口文象を左翼だと思わずに評論するということはな

There are architectural groups similar to RIA which shared concerns about art and society. For example, Walter Gropius left Bauhaus to immigrate to the United States. He mobilized seven young architects under the name of The Architects Collaborative (TAC) to be engaged in architectural designs in a more anonymous organization within an industrialized society. Students in Tokyo University under the leadership of a professor-architect Kiyoshi Ikebe formed an architectural design firm, "Rengo Sekkei-sha." In the mind of Ikebe, art and making contributions in society through industrially manufactured materials were not in conflict. It is most likely that at that time, these concepts were still undifferentiated.

People in RIA seemed to be conscious of GK. They made references to GK, TAC and Ikebe's group as they considered how they should operate their firm. All of these groups consisted of one big boss surrounded by young architects. The bosses attempted to change society through architecture with the help of young architects. RIA also attempted to implement a council system within its office, and as a step, it held design competitions among the staff including Yamaguchi.

In my view, Yamaguchi was more concerned about art than being politically leftist as is generally considered. He devoted himself to the contemplation the theme of art, or what is the substructure of art.

Later, RIA began using computers to design houses to meet clients' desires. Perhaps, a room might have been packed with computers at that time. Then RIA designed a fireproof building called "Shin Osaka Sen-i (textile) City" in Osaka to house textile wholesalers together. As speed in designing was emphasized, they could not devote much time and energy to artistic elements. Then, the RIA team began to question whether society demanded creativity or

かったと思うので、今まで山口文象をやってきた人からすると「なんじゃこりゃ」と思われる文章になっています。僕の考えでは、彼は文字通りの政治的志向を持つ人というよりも、芸術を生涯のテーマとして考えていたのではないか、ということです。

RIA はその後、住宅の大量生産を考える中で、コンピューターでクライアントの希望に応じた設計を弾き出すという、当時だとたぶん部屋いっぱいのコンピューターを使った設計手法にも取り組んでいました。それから新大阪センイシティという、繊維の問屋さんを集めて防火建築の中に収めたという建物の設計の中でも、スピードを重視するということが多くて造形にあまり力を入れられなかった。このあたりから事務所の中で作家性というもの、あるいは芸術性というものが社会に必要とされているのかどうか疑念が生じる。その結果、我々のやるべきこと、時間を掛けるべきことは芸術としての建築というよりは、まちづくりとか再開発なのではないか、というふうなかたちでコンサルに事業を傾けていきます。結果として、今は株式会社として組織設計事務所の一翼を成している。そういう組織です。

何故この二つを考えてみようかと思ったかというと、RIA の方は芸術とある種の社会主義との両極に引き裂かれたわけですが、GK は「幕の内弁当」というのが組織論の中で比較できるか

なと思います。「幕の内弁当」というのは榮久庵さん自身が書いている言葉で、「無名化、平等化、共同意識化、非組織的な組織」といった言葉で解説されています。いろいろなバラエティに富んだもの、いろいろなおかずを GK という枠の中で用意するということだと思います。

それで最近になって何故 RIA など匿名の制作が注目されているかということですが、ネットを介した協働というような技術的なこともあるのですが、社会的にアーキテクトという位置づけが変わってきています。自分の名前を出した個人事務所よりも、例えば「みかんぐみ」のようなユニット化というのが最近――と言っても 20 年くらい前からですが――流行っています。最近、さらに違う様相が出てきていて、アーキテクトというのがもうちょっと地域に根ざしたかたちで地味と言うか、全国レベルの媒体に載ることを目指すよりもその町に根ざすことを志向する建築家のあり方が、いくつかある中の一つの方向性として最近論じられている。その中で建築家の匿名性とか共同制作といったことが注目されてきている。そういう状況が最近あるので、そういうご紹介をしました。

伊坂　プロフィールにありますように天内さんはデザイン史という立脚点もございます。その立場から、デザイン史の中でもかなり超現代史の分析を示されました。芸術と社会というものの捉え方については、我々の会自身が「デザイン」という言葉を使いながらも、専門デザイン以外の分野を数多く抱えている中でソーシャルデザインというキーワードを出しています。それにこの辺の切り口が迫ってくるかもしれません。これはまた後ほどの議論にしたいと思っています。

---

artistic qualities from an architect. They concluded that rather than designing architectural pieces as art, they needed to devote a greater amount of time to town development or redevelopment. As a result, RIA began to focus on architectural consultation work. It is now an architectural office conducting a wide range of activities including research studies, planning, and designing urban sectors, buildings and houses.

The reason why I compare RIA and GK is that while RIA was torn between art and a certain kind of socialism, GK presented the concept of "makuno-uchi-bento" to use the words of Ekuan himself. A Bento is a box meal in which 10 to 15 small portions of fish, meat, vegetable and even sweets are contained in addition to rice. These items are arranged colorfully and beautifully. As Ekuan explained, it symbolizes a "nameless, equal standing, community spirited and unsystematic organization" of design. GK prepares a variety of dishes to put into a Bento box to put forward to clients. Seen from this perspective, art and social usefulness are not contradictory in GK.

Anonymous architectural works have been noted in recent years. It is partially because of the technological development that allows collaborative activities through the Internet, and partially because of a change in the social position of architects. In place of individual architects' offices, the growth of design units has become noticeable. In addition, there is a growing trend in architects who base themselves within a community and then work for that community over those who attempt to become big name architects. Along with this trend, the anonymity of architects and collaborative projects are becoming remarkable.

ISAKA: Amanai specializes in design history, and showed us his

温故知新に学ぶ日本の「感性」と関係のデザイン

森田昌嗣
九州大学大学院芸術工学研究院教授・副研究院長
九州大学感性融合デザインセンター長

私は、GKにアルバイトを含めて16年ほど在籍していましたので、榮久庵憲司さんは、私にとっては榮久庵会長という言い方になります。榮久庵会長から教えていただいたのはデザインのこころだと思います。

今日は、近代の変遷から話をしたいと思います。近代合理主義の考え方の「理性」というものを中心に20世紀にはその成果が期待されていた。ところが、豊かさというものが、果たして効率性、利便性で成し得るのかということが、特に1960年から70年にかけて、さまざまな公害をはじめとする近代合理主義の効率・利便性の追求の結果など、人類に大きな課題を投げかけられた。そして現在「こころ」に関わる「人」の質的満足というものが21世紀の大きな価値観に転換しつつあると考えます。

そのとき、人の「感性」の視点に一つ着目する必要があろうと思います。感性という言葉が出た当時はあまり日本では触れられなかったのですが、この感性という言葉自体は中国からきている言葉ではなく日本オリジナルの言葉です。英語に訳すと、sensitivityやemotionなど多様な意味を含んでいます。

感性は、非常に非言語的、無意識的、直感的であり、感受する能力です。そして、悟性（対象を理解する能力）の素材となってその理解のもとに推論を行います。つまり、感性がないと理性も働かないということになります。長い歴史の中でも、人としての根源的能力の感性と構築的能力である理性の相互作用によって文明、そして文化が形成されると言えます。この辺の話は梅棹忠夫先生が話された内容を少し引用させていただいています。

つまり、感性と理性の関係によって文明と文化が形成される。その時代における人々の理性の構造化が文明であって、その文明を人々の感性によって投影して映し出されたのが文化と言えます。

日本を考えますと極東に位置し、特有な文明と文化を育んできています。西側の国の地域の文明と文化が伝承の連鎖によって極東のわが国に伝えられましたが、わが国の東側は太平洋をひかえてさらなる伝承の地が存在しません。そのために、わが国は西側の文明と文化の終着地となり、伝播することはできず醸成させることに価値を見いだした

錦帯橋（山口県・岩国）
Kintaikyo-Bridge, Yamaguchi. Iwakuni

飛騨高山（岐阜県・高山）
The Historic Street of Hidatakayama, Gifu

鹿苑寺（金閣寺）（京都府）
Rokuon-ji Temple (Kinkaku-ji Temple), Kyoto

白川郷・五箇山（岐阜県・白川）
The Historical Villages of Shirakawa-go and Gokayama, Gifu

「感性」と「理性」の調和が人と心の美しい作法、もの、そして場が連携した「しくみ」をかたちづくっている。

The harmony of "kansei" and "reason" produces a "mechanism" in which "beautiful ways of people's behavior reflecting their mind," "things" and a "place" are interconnected.

---

analysis of modern history. When considering elements that are important to our organization's social design concept, art and society may be rephrased as "design and society."

Japanese "Kansei" and Design of Relations learning from the Japanese concept of treasuring the past and learning from the present

Yoshitsugu MORITA
Ph.D., Professor, Vice-Dean,Faculty of Design, Kyushu University
Director, Kyushu University KANSEI Center for Arts and Science

Throughout my 16 years of working at GK, including my time as a working student, I learned the spirit of designers from chairperson Kenji Ekuan.
Modern rationalism, dominant in the 20th century, was seen as the way to enrich modern living. Conversely, it brought a plethora of problems, above all, environmental pollution, particularly in the 1960s and 1970s in Japan. In reaction to this people are coming to place a greater value on qualitative or emotional satisfaction than on material satisfaction.
Here, the viewpoint of "kansei" should be noted. This term originated in Japan. It indicates a responsive ability covering non-verbal, non-conscious, and intuitive sensitivity. It may cover sensitivity and emotions. It supports one's ability to draw an inference from things and situations in our everyday living. As a result of interaction between kansei, as a fundamental ability, and reason, as a constructive ability, civilization and culture are formed. The reasoning of people in any age, given structure, become the basis for their civilization, and when the civilization is projected on people's way of living, it becomes a culture.

のではないか、という説があります。

伝播でなく醸成のために持ち込まれた文明と文化を理解する。つまり、醸成の悟性を繰り返すことによって、特有な解釈となる内在的感性を育むことになったのではないだろうかと考えます。

特に、わが国においては室町期と江戸期に個性豊かな思想、芸術、文化を醸成させたと考えます。そこには、榮久庵憲司会長がよく言われていた作法なのですが、人と心の美しい作法、もの、そして場の連携した「しくみ」をかたちづくっていると言えます。

日本が残してきたさまざまな文化の継承というものをよく捉えていくことが必要なのではないかと考えます。有形であれ無形であれさまざまな伝承が行われ、非常に華やかな成果に結びついていると言えます。最近では、伝統的なまちなみに関しても非常に高い関心を得ており、日本の観光地としての成果も示されております。

ここで司馬遼太郎さんを引用させてもらって、感性と理性の調和による進展というものを考えたいと思います。

司馬遼太郎さんは、皆さまも読まれていると思いますが『この国のかたち』で誇るべき美しい「かたち」を語っております。『この国のかたち』では、昭和初期から敗戦にいたる時代というのはこのかたちを忘れた悲しむべき時代であり、さらに戦後は、欧米との経済戦争でわが国を勝利へ導くために猛進した特異な時期であったと指摘しています。

このことを私なりに解釈すると、高度成長期からバブル経済崩壊にいたる約半世紀は、欧米に追いつけ追い越せをかけ声に性急な近代合理化を「技術」優位に推し進め、技術の手本は欧米であり、わが国が培ってきたこころのしくみは非効率的・非合理的な前近代の遺物となっていたといえます。しかし現在、物的満足だけでは真の豊かさが得られないことが大きな現実の課題となり、さらに情報技術の飛躍的な進展も加わって多様な社会や生活の現代的課題が浮き彫りになってきました。まさに、その課題解決に向けて「こころのしくみ」による取り組みが再評価されてきていると言えます。

ここで一つ目に言いたいことは、こころを美しいかたちに可視化することが肝要であろうということです。つまり、次代を拓くために感性は重要なキーワードに位置づけられます。そのためには、わが国の先達が残した感性と理性の調和、感性の連鎖（コミュニケーション）による共助、感性を物語る価値創出など、わが国の美しいかたちからの学びこそが、感性を学と成す手がかりになるのではないだろうかと考えます。

そこで私なりの解釈を加えていきますと、感性を可視化するための手法としてデザインがあると考えます。感性を可視化する方法としてデザインがあって、デザインには「物」と「事」と「場」の関係を機能と感性の融合によって統合化し、その関係の価値を「かたち」に可視化し事業に結びつけることである、というふうに位置づけています。

今日はソーシャルデザインというテーマですので、私自身がGK時代から専門分野として実践的研究を進めているパブリックデザインの概念を例に少し紹介させていただきたいと思います。

龍安寺、方丈庭園（京都府）
Ryoan-ji Temple / Zen Dry Landscape Rock Garden, Kyoto

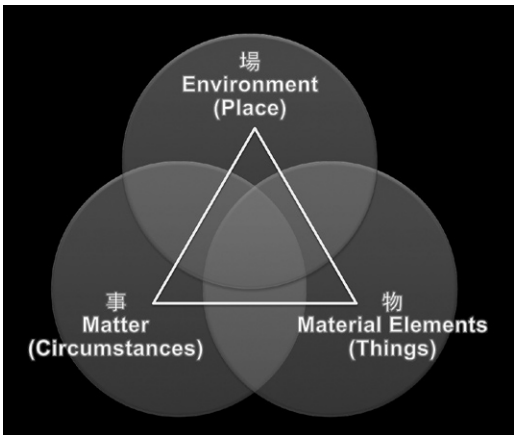
日光、東照宮（栃木・日光）
Nikko-Toshogu Shrine. Tochigi, Nikko

「感性」と「理性」が融合した日本美。わが国の「美しいかたち」からの学びこそが「感性」を学と成す手がかりになるのではないだろうか。

"Kansei" and "reason" are fused in Japanese beauty. Learning from the inherent beauty in Japanese forms might provide us with a key factor to push forward "kansei" as an academic study.

There is a theory that Japan, located at the eastern edge of the origins of civilization has been a receptacle for cultural influences from the west. Having absorbed these infusions of culture, the Japanese fostered and cultivated them, integrating them into their own culture resulting in the creation of a unique culture within the archipelago that was not transmitted elsewhere. It may be considered that kansei, specific to Japanese culture, was nurtured through this repetition of absorbing and cultivating cultural influences. The Muromachi (1336-1573) and Edo (1603-1868) periods are noted as eras during which systems of thoughts, art and culture matured. As Ekuan often said, it was during these periods that our etiquette, the ways in which we express our thinking and our ways of linking objects with places were formed. We have succeeded many traditional and cultural things, both tangible and intangible, and now, even traditional townscapes are gathering people's interest as touristic resources.

In the widely read book, Kono Kuni no Katachi (Forms of this country), the author Shiba Ryotaro refers to beautiful "forms" that we should be proud of. He points out that the period from the mid-1920s to mid-1940s was a deplorable period, and that the postwar period was an extraordinary period in which Japan competed in economic development with western countries. In other words, for the half century from the rapid economic growth period to the collapse of the "bubble economy," Japan pushed forward modern rationalization with "technology" as a driving force, and the long-held mindset of the people became an inefficient and unreasonable relic of pre-modern days. Now that we have realized that material affluence does not give us richness in its real sense, we are faced with numerous problems and taking an emotional approach to these problems is re-evaluated.



デザインとは、機能と感性の融合によって統合化し「物、事、場の関係の価値」を「かたち」に可視化し事業に結びつけることである。

Design is an act of integrating a thing, a matter and a place by harmonizing a function and kansei, and realizing the value of the relations between them in a form, and then leading the realized value into a design project.

パブリックデザインは、感性価値形成のための関係のデザインの実践的手法の一つと言われています。私たちの暮らしを支えているさまざまな公的空間は、利用者にとって魅力的なさまざまな要素が用意されることによって快適な場を提供しています。その場をつくるためには、私が考えますにはパブリックスペースの多様な要素の「秩序化」と「個性化」の方法を検討する必要があろうと思います。

では、秩序化と個性化の方法について私がGK時代に関与しましたプロジェクトを通して二つの例をみていただきたいと思います。

私的財産に関しては日本のデザインレベルは非常に上がっております。ところが、社会資産に関わるデザインはまだまだ途上にあります。その例として、特に公的に設置された標識類があります。

街路にさまざまに立っているポールを秩序化のために集約する、それを1989年に製品化し実施できました。これは秩序化することによって集約するというデザインの方法です。

さらに同じ考え方で、交差点そのものにあるさまざまな要素を一体化することによって個性的な展開に置き換えるというものを西新宿の交差点のゲートに設置しました。

私の言っている秩序化と個性化のデザインというのは、デザインする対象の歴史的・文化的背景を踏まえて、その価値形成における「主役」と「脇役」の配役を決定することが重要であろうということです。そこには「空間」と「情報」と「時間」の価値があり、その三つの価値を結びつけるベクトルを見極めて可視化する。つまり、主役を務める「個性化」のベクトルと、脇役を担う「秩序化」のベクトルの方向を決定して、空間と情報と時間の価値をどう構築するかがパブリックデザインの方法と考えております。

最後に、私が最近携わったプロジェクトにJR博多駅の博多口駅前プロジェクトがあります。このプロジェクトを通して「秩序化」と「個性化」の概要を説明したいと思います。

博多駅の博多口駅前は、従前はほとんどが交通広場で福岡の顔となる駅とはとても言えない状態でした。さまざまな方たちと連携し、私はエクステリアのデザインディレクションを務め、建物のインテリアに関しては水戸岡鋭治さんが務められました。

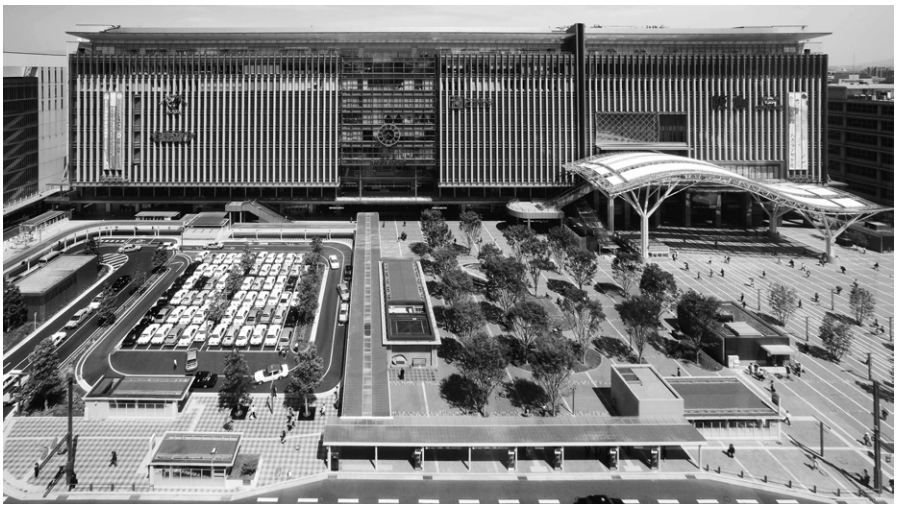
引き算のデザインという発想はこの会でも出ておりますが、私は秩序化のデザインと言っています。パブリックデザインの基本であり景観調和のデザインです。この駅前広場では、ヒューマンスケールを超える構造物に関しては、すべて秩序化の方法を用いて計画しました。例えば、12ｍくらいある街路灯、これはグレーのツートーンによって構成されています。建物は三菱地所設計が担当されましたが、建物のデザインとの連携を考えて同調させるデザインです。他の防護柵との工作物も同じようなデザインを展開しています。

First, I consider it essential to visualize Japanese kansei in beautiful forms. One way to visualize kansei is through design. Designers should work to integrate the relations of material things, non-material things and places by harmonizing functions and kansei. Only by visualizing the value of the relationship can we effectively implement a design project.

Second, I would like to present the concept of public design. Public design is a practical method of designing relations to create the values of kansei. Public spaces filled with enchanting elements provide users with comfort. Therefore, methods of "ordering" and "distinguishing" a public space need to be examined. Let me show you two examples that I was involved with while I was at GK. One is a group of public signs. Poles along the streets were gathered together for the purpose of ordering. These were launched as products in 1989. The gate at the intersection of Nishi Shinjuku was designed taking the same approach and it was further distinguished.

For ordering and distinguishing, a leading part and supporting parts must be determined taking into account the historical and cultural backgrounds of the space. The direction of the vector of "distinguishing" the leading part and the direction of the vector of "ordering" supporting parts must be determined, after which the values of space, information and time should be considered in creating public designs.

An example of ordering and distinguishing elements is the redevelopment project of the front of Hakata railway station. As director of exterior design for this project, I applied the ordering method for all structures that were larger than human scale. Street lamps which are 12 meters tall were designed with two grey tones to harmonize with the building design. Other structures are also



JR博多駅博多口駅前広場全景。個性化のポイントを大屋根の曲線性におき、秩序化の方法でデザインした直線で構成する路面と建物のファサードとの対比的な調和を展開した。

A full view of the JR Hakata station square. The distinguishing point is placed on the large curved roof, and straight lines on the ground and the façade of the station building are designed through an ordering method. Thus, a contrasting harmony of straight lines and the curve is sought.

JR博多駅博多口正面
JR Hakata station front

JR博多駅博多口駅前広場方向
JR Hakata station square from the station building

一方、魅力のデザインをどこに置くかですが、ローカルの特質を表すデザインを目指そうと地元の方たちとさまざまな話をしたのですが、かたちをもって博多らしさを出すということをやめようということが大きな方針となりました。そのかわりに植栽、舗装、ベンチ、彫刻といったところに個性を見出そうという方向です。特に、広場の舗装に関しては非常に地味な対象ですが、東西軸と南北の帯を格子のリズムで博多・福岡の天地人をデザインする。何気なくウエルカム感とか博多の人の受け入れる姿勢を表現しようということです。特に、福岡市というのは福岡と博多が日本では珍しい双子都市を形成しておりまして、東に福岡、西に博多があります。それを博多の帯柄をモチーフにして縞柄のグラデーションで展開しています。

それから一番大きなポイントとしては、建築と連携した大屋根のデザインです。非常に直線性の強い建築であったので、とにかく魅力のポイントとしてはこの大屋根にもってこようと。この大屋根の曲線性とそれから先ほどの直線で構成する路面と建物のファサード、その対比的調和で展開しようとしたものです。

以上、細かな話はできませんでしたが、JR博多駅博多口駅前広場を通しまして私が考える秩序化と個性化によるデザイン、パブリックデザインの作法について説明をさせていただきました。

伊坂　今、「感性」と「理性」その中での「こころ」というキーワードが出されました。榮久庵さんは「もののこころ」ということをよくテーマに挙げています。そのこころの価値観としてのデザイン。さらにはパブリックデザイン、公共のデザインの秩序と個性という話がありました。榮久庵さんはデザイン手法として「複雑の単純化」ということをよく言われました。緻密なデータを積み上げて、それを一枚のペーパーに一言でまとめ上げる。「一言で言うと何だ」とよく言われたことがあります。単純化というものを、複雑な思考を経る中で一つの秩序に結びつけていくことだと。それが個性に結びつくということだと思います。

designed in the same way.
In contrast, plants, pavement, benches and sculptural works were used as defining elements. Particularly, the pavement of the plaza is very plain, and the lattice pattern consisting of east-west axes and north-south belts in the image of the Hakata kimono belt was designed to symbolize Hakata – Fukuoka's twin city.
The greatest point was the big roof. The building itself is linear, so I considered this curved big roof to be its attractive point. The curve of the roof, the linear road surface and straight façade of the building were harmonized.

ISAKA: Ekuan often said "Simplification of the complicated" as a design technique. Going through minute data and compiling it all into one sheet of paper. Simplification is an act of giving order to a complicated thinking process. It will lead to distinctions.

The World is not One
– the true role of designers. Imagination is necessary to be able to see different worlds.

Kozo YAMADA, President, GK Design Group

The day before the funeral, the rite of placing his body in the coffin was conducted with his relatives and GK executive staff in attendance. Together, we put the finishing touches to his white traveling outfit to go to the other world. We put white socks on his feet, tied knee pads and a cloth to cover the back of his hands, put straw sandals, and a white wooden cane, a woven hat to protect him from sunshine, and further, paper-made six one-mon coins as a fee for a boat to cross the River of Three Crossings before reaching the other world. Indeed, he would ride in a boat. But wait, I remember that he had already designed a vehicle to cross from this

「世界はひとつではない」——デザインの真剣

山田晃三　GKデザイン機構代表取締役社長

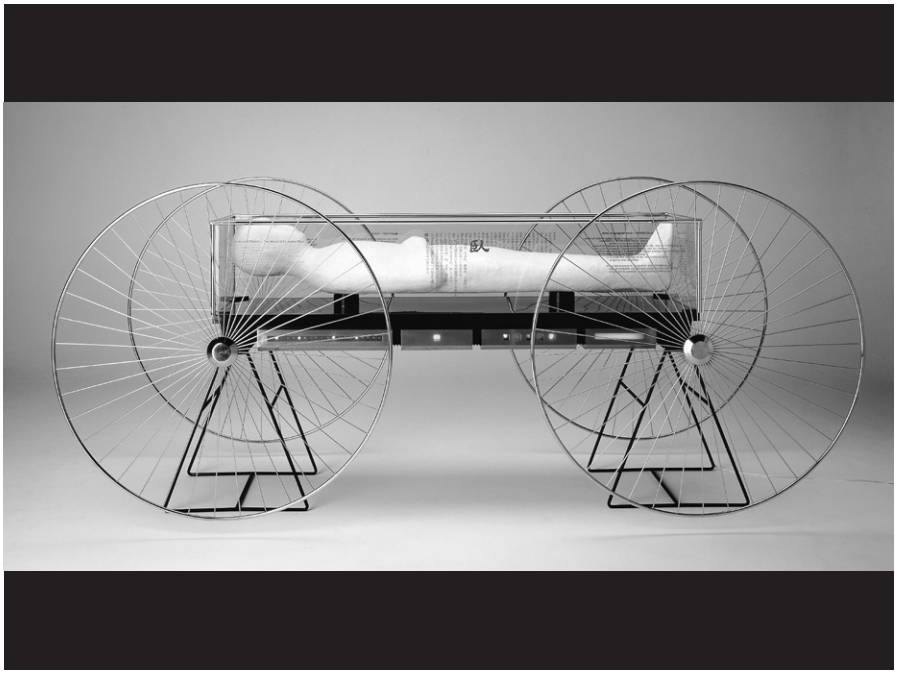
「榮久庵憲司で切る」というお題をいただきました。そのときに榮久庵憲司のデザインの刀って何だろう、これを考えることだと思いました。そして、かなり真剣に考えないといけないなと思いましたので、副題をデザインの「真剣」としました。

榮久庵憲司会長が逝去されて4ヶ月、私はこの間、葬儀委員長として、「人が逝く、そして送る」という立場の中で、さまざまなことを体験し、多くを学ぶことができました。この間に考えてきたことを中心に今日、これからのデザインの役割というものについてお話しいたします。

榮久庵会長は、2015年2月8日に亡くなられ、密葬儀前日に、「納棺の儀」を行いました。この時、親族の方々とGKデザイングループ各社の社長たちで、あの世にこれから旅立とうとする白装束の会長に真っ白な足袋を履かせ、膝当て、手の甲当てを結び、真っ白な白木の杖を持たせ、草鞋を履かせ、さらに暑い陽射しを避けるための編み笠を持たせました。そして三途の川を渡るときの船賃、六文銭を懐に忍ばせました。僕はそのとき「そうか会長は舟に乗るのか」と思いました。ちょっと待てよ、会長は、かつて自分自身がデザインした舟、このときのための此岸から彼岸に至る乗り物を、すでに用意していたではないか、と。

これは1982年に会長自らデザインした旅立ちのための「臥人の像」（“Men's Soul Vehicle”）です。このアルミの車輪、空調の効いたクルマで軽やかに三途の川を渡るのです。この臥人の像は本人の身長でできています。人は臥して生まれ、座して知り、歩して活き、再び臥して死す。臥は安らぎと同時に生の源流である。このビークルは彼岸への道をめざすための実用の乗り物です。荼毘に臥された2月12日から、このクルマは故人を乗せて、いく筋もの川を越え、いくつもの関所を通り、本願を成就しながら、49日後の3月25日、自身が夢にまで見た永遠の安らぎの世界、極楽浄土に至りました。真善美極まった彼岸の世界をもまた、故人は現世において想像していました。行ってみないと分からない世界ですが、今頃、かつての戦友たち、朋友たち、懐かしい道具たちとの出会いの中で、けっこう楽しくやっているのだと思います。

私にとって榮久庵会長は、想像力に富んだ、たぐい稀な指導者でありました。この数ヶ月、私は「世界はひとつではな



「臥人の像」1982年。人は静かに臥していても心身の生の証＝頭脳を活動し続ける。
“Men's Soul Vehicle,” 1982. Even while laying calmly, one's brains continue to work. It is a proof of the living mind and body.

side to the other side.
It is the “Men's Soul Vehicle” that he designed in 1982. Made of aluminum, it is an air-conditioned transparent vehicle to lightly cross the River of Three Crossings. Lying is the source for rest as well as life, so he says. On this day, the vehicle became a practical vehicle to go to the other world. From the cremation on February 12, the vehicle carried the late chairman to cross a number of rivers and checkpoints. After accomplishing his desires on the way, he reached the eternal land of rest, the Buddhist Pure Land, 49 days later, on March 25. Chairman Ekuan was an uncommon leader, rich in imagination. For the past several months, I strongly realized that “the world is not one.” The “other world” will settle injustice in “this world” and relieve people from suffering.
Human beings noticed the existence of “death” at one time, and obtained the ability to live by imagining the world after death. We also noticed at an earlier time that death did not mean real death but a process of eternal transmigration. It may suggest that we should live wholeheartedly, not to live long, but live to the best of one's ability today. Chairman Ekuan lived like a boy, and headed to the other side gallantly.
The earth does not exist only for human beings. Mountains, rivers, grass and trees, insects, fish and all other living things coexist equally having their own worlds. In order to have a gentle heart that is merciful toward others indiscriminately, great imagination is essential. It can be said that the sensibility to duly appreciate things in nature emerges only from one's own imagination. For example, butterflies have their own world. They can see what is invisible to us. They can see ultraviolet rays. They are not interested in the human world. Dogs also have their own world and recognize it as their world. With their excellent sense of smell,

い」ということに、ことのほか気づかされました。もう一つの世界、「あの世」が、この世の不条理を収め、衆生の苦悩を救う。

類人猿から成長したひとは、ある時から「死」というものの存在に気づき、生きることの恐怖を知り、その先の世界を想像することによって、今を生きる力を身につけました。死は、死ではなく、永遠の転生であることにも早くから気づいていました。

近年は、生物進化学においてもリチャード・ドーキンスが『利己的な遺伝子』（“The Selfish Gene”）のなかで、「肉体はDNAの乗り物にすぎない」ことを証しています。現世を良く生きること、これは長生きをするということではありません。正しく、精一杯いまを考え、生きるということではないでしょうか。故人は少年のように、颯爽と彼岸に向かいました。

一方、「世界は、人にのみあるものではない」。山川草木虫魚、生あるものは全てにおいて平等に生き、それぞれがそれぞれの世界を持ち、生きているということです。他の生命に対して、自他怨親のない「慈悲の心」を持つには、大いなる「想像力」が不可欠です。「もののあはれ」を受けとめる感性は、自らの想像力にのみあるといって良いでしょう。例えば、蝶には蝶の世界がある。僕らには見えない蝶の世界が蝶には見えている。現に彼らには紫外線が見えます。彼らは人間の世界に興味はない。また、犬は犬で、しっかりとした自分の世界を持ち、これが自分の世界だと認識しています。彼らは、僕らの世界認識とは全く違う優れた嗅覚による独自の世界を持っています。

私たちがいま信じている、「地球は丸く、70億もの人が暮らす惑星である」という認識は、ついこの間気づいた幻のような世界認識にすぎません。少し前は、平らな動かない地面の上に生きていると信じていたわけです。いずれまた違った世界が現れることは想像に難くないと思います。情報技術が描き出すこのグローバルでリアルな世界が唯一の「絶対的な世界」であると思うのは、あまりに想像力に欠ける。この地球上には、無限の世界認識が存在し

「池中蓮華」榮久庵憲司と GK の世界 ―鳳が翔く展　世田谷美術館　2013 年（撮影：富田眞一）
"Lotus Flowers in a Pound" The World of Kenji Ekuan and GK Group: Soering High in the Sky "Setagaya Art Museum 2013" (Photo: Shinichi Tomita)

「地球は丸く、70 億もの人が暮らす惑星である」という認識は、ついこの間気づいたにすぎない。
（Geo-Cosmos 日本科学未来館　2011 年）
"The earth is a globe, and it is a planet on which 7 billion people live." This fact came to be recognized only recently.
(Geo-Cosmos, The National Museum of Emerging Science and Innovation, 2011)

they have a special world of their own which is completely different from the world we recognize. The earth is a round planet on which 7 billion people live. This recognition that has come to be commonly held by modern people is quite new in human history. Until sometime before this recognition was accepted, people were believed to be living on a flat, unmovable earth. It is not difficult to imagine that there would emerge a different world. It would mean a lack of imagination to consider that the global and real world drawn by information technology is the only "objective world." There are countless world recognitions on the earth. They further pass through space and time.

Many of the clashes and conflicts in today's society seem to have been caused by a lack of imagination, and by human nature not being able to admit diverse world views. That everything has a heart means that everything has its world. There is no absolute yardstick of richness of humans. We need to expand our potentiality with relative world recognition, and build "one's own world" with confidence. The role of designers is to draw the world like a myth that one believes or the world that one wants invaluable persons to believe. My mentor taught me that this is how true designers should be.

The late Ekuan, with such a viewpoint, found "dougu world." He saw life in dougu. Dougu which emerged together with human beings hundreds of thousands years ago, also created their own "world of dougu" in this world. In their world, they are sharing feelings and are living in flux through the endless circle of transmigration. Dougu is the embodiment of human desires, or even the offshoots of humans.

"Since the world of dougu is born from human desires, you should look into the mirror of your heart, learn how to live as a person,

ています。

現代社会の混乱の多くは、他者への想像力の欠如、多様な世界観を認められない人類の性からくるのではないかと思います。万物に心ありとは、万物に世界あり、ということであります。ひとの豊かさに、絶対的な指標はありません。こうした相対的な世界の認識によって、自分たちの可能性を大いに広げ、私たちは自信を持って「自らの世界」をつくりあげていくべきではないでしょうか。

現代社会は「いま世界はこうなっている、そんなことも知らないのか」と、いつも人を攻める。しかし、デザインの役割は、自らが信ずるべき世界を、あるいは、大切な人に信じてもらいたい世界を、まるで「神話のごとく描き切る力」のことではないかと考えます。これがデザインの最高の刀「真剣」であります。

榮久庵会長はそんな眼差しから、「道具世界」を見つけました。道具たちの世界です。

数十万年前に、人類とともに誕生した道具たちもまた、この現世において「道具世界」をつくり、道具たちの喜怒哀楽を共にし、輪廻転生に身を置いています。道具はまた、人類の欲望の化身です。もっと言えば、道具は我ら人類の分身でもある。「ひとの欲望によって誕生した道具世界なのだから、この心の鏡を覗き込み、人の生き方を学び反省し、そして堂々と、人類の未来を描きなさい」。榮久庵会長のこの言葉は、私たちの人生をより深く、有意義に、実のところ、「楽しく生きる」ための心得ではないかと思います。このデザインの刀「真剣」をくれた榮久庵憲司会長に、こころより感謝する次第です。

伊坂 「真剣」「世界はひとつではない」そして、すべてに平等にそれぞれの世界があるということは、仏教用語でいうところの「共生、ともいき」といったようなことかもしれません。今、お話にあったように他者への想像力、イマジネーション。これはよく榮久庵さんも言っていた「おもてなし」、茶道の心得などにも通じる部分があるかもしれません。

形あるものの総合的なデザインの行き着くところはソーシャルデザイン

車戸城二 竹中工務店執行役員

非常に楽しいデザインの話から現実に戻っていただきます。我々の日常にあります不動産開発ビジネスのことから始めてみたいと思います。私どもの会社も、その一翼を担っています。

よくあります指標は最大賃料収入で、これを目指して巨大なタワーを計画します。ところが、景観や環境が悪くなるといって周辺から反対運動が起こります。これはよくあることですが、巨大開発の利益が優先されるのか、景観環境規制が優先されるのか、という対立の構造になり、どちらが正しいのか、という話になります。

高い賃料を払って、高いタワーに入ろうとするテナントは、高収益の会社にちがいないわけです。高収益企業は、ビジネスのために情報密度の高い環境を好みます。高密度情報環境というのは実際はどういうところかというと、ニューヨークのミッドタウン、ロンドンのシティ、東京・丸の内、香港のセントラル地区などです。こういうところは賃料が高い巨大タワーがいっぱい建っている。これは一つの原理を表しています。

ところがもう一つの側面があります。企業は有能なワーカー、簡単に言うと利益を上げられるワーカーを集めなければ

---

search your own conscience, and stately draw a future." What chairperson Ekuan wanted to suggest in these words must be the basic guidelines for us to live more deeply and significantly, and as a matter of fact, "to enjoy living."

ISAKA: Imagination to consider others might be needed for *Omotrenashi*, heartfelt hospitality in a tea ceremony that Ekuan often referred to.

Business profits are indispensably related to social sustainability.

Joji KURUMADO, Executive Director, Takenaka Corp.

In the business of real estate development, the greatest goal is to obtain the highest possible rents. For this purpose, developers today will plan to build a monolithic building. To which neighboring communities initiate an opposition movement, it will adversely impact their living environment and dramatically alter the scenery. Which should be given priority here? The potential profits from the large project? Or, restrictions for maintaining the environment and scenery? Thus, a conflict of interests arises.

In general, the tenants that want to rent high-rent spaces in a tower building are high-profit corporations. For the sake of their business, they favor an environment with high information density. Such environments are Midtown in New York, City in London, Marunouchi in Tokyo and Central in Hong Kong. High-rent and huge high rise buildings abound in these city sections.

There is another aspect for corporations. Corporations must have competent workers who are able to bring profits to them. But these workers do not want to work in an uncomfortable, high-

ならない。有能なワーカーというのは、今、世界の中で働き場所を探していますから、何も非常に居心地の悪いところにぎゅうぎゅうに寿司詰めになって働こうとは思わないですね。有能なワーカーは、高密度で居心地が悪い環境の高収益の企業にはこない。つまり、企業そのものもそんなところに自分の会社を置こうとは思わない。というふうになります。

そうすると、高密度つまり容積の量と、快適性つまり質を両立させなければならない。先ほどの対立の構図の中に、環境や景観といったようなことも実は入ってこなくてはいけない。これらは実は、企業が有能なワーカーを集めて高収益をあげるための重要な要素だということになるんです。つまり、この対立はゼロサム、つまりどっちが正しいのかという議論ではなくて両方正しいと言わなければならない。

これがCSR（Corporate Social Responsibility）です。これは最近非常に言われていますし、当社の社内でもここ数年、こればかりやっています。この定義は、企業が存続（利益）に必要不可欠な社会の持続的発展に対して必要なコストを払い、未来に対する投資として必要な活動を行うことです。企業の究極的な目的というのは、長期の利益の安定だと言われています。投機利益とか目先の利益を上げても、そのあとに壊滅的な打撃を被るようなことをしては、結局はステークホルダーの利益を損なう、というふうに今は考えられています。持続的な発展

というものを維持するための社会に対する投資というのを行わなければならないというのがCSRの定義です。そういうところから都市における企業価値を考えたり、企業において利益に直結する要素が都市ではどんなことだろうか、と考えることができます。簡単に言うと都市計画みたいな話です。用途計画、容積率計画、道路計画、エネルギー計画、公共交通計画、緑化計画、景観設計、セキュリティ計画これには安全保障なども含まれます。それから、BCP（Business Continuity Plan）、これは災害も含まれます。食料計画、公共施設計画。こういったものが全部含まれます。

こういったものに対して、これまでは一つの計画をやるときにいろいろな規制やルールとなっていました。そして一生懸命こういうものをコンプライアンスしなければいけないという、ある意味で消極的な態度でさまざまな開発が行われてきた側面が、全部とは言いませんがありました。ただ、そういうものを乗り越えて不動産開発をするために、今言ったような諸要素を全部統合してあるべきビジョンというものを提案できれば、そういうことができた企業は非常に大きなブレークスルーをするのではないか、と考えられます。

つまり、企業利益のために、榮久庵さんはじめ水野さんが発意した日本デザイン機構が標榜してきたソーシャルデザイン、あるいはホロデザインを考えなければいけない。ホロデザインとは、デザインが全てつながっていて、大きいところから小さいところ、あるいは水平的にも全てつながっていると、あるいはつながるべきだ、あるいはつなげてデザインするべきだとすると、それを使って社会のソリューション、社会的な問題に対して解決をしていくということがソーシャルデザインという関係かと考えています。つまり、我々の社会はソーシャルデザインの巧拙が社会全体の競争力に帰結すると。

この競争力という言葉には反感を持たれる方もいらっしゃいます。「我々は何も競争していない」、あるいは「豊かさというのは競争じゃない」という方がいるかもしれませんが、現実的には我々がいる地球上の社会というのは、我々が好むと好まざるとに関わらず競争に晒されている。ですから、これが直結していないと考えるときは、この競争に負けている状態を甘受する覚悟が必要になりま

density environment. In consideration of this factor, corporations will hesitate to locate their offices in such a place. In order to be financially successful, corporations are placed in the situation of having to choose between quantity, or high-density and quality, or comfort for workers, balancing what makes sense for the company ledger with what makes their employees comfortable. In addition, the surrounding environment and cityscape must be also taken into account.

Corporate social responsibility (CSR) is increasingly talked about. It is considered that corporations must pay due cost in the sustainable development of society because it is indispensable to their survival (profits), and that there are activities that they must carry out which are investments for the future. The ultimate goal of business corporations is to have long-term stability of profits. In order to maintain sustainable development in business, corporations need to invest in society. This is the definition of corporate social responsibility. For us as a real estate developer, we need to consider the value of the company in a city, and elements directly leading to its profits. They include planning for land-use, floor-area ratio, roads, energy, public transportation, tree planting, scenery, security, and a business continuity plan (BCP) including emergency measures for disaster, food preservation, public facilities, and so on. Until recently, we addressed the rules and regulations for every element. But if we approach each real estate project from the viewpoint of creating a total vision, integrating all elements while paying consideration to those rules and regulations from an all-inclusive perspective, a real estate developer might enjoy a major breakthrough in its business.

In other words, it implies holo design and social design that the Japan Institute of Design has been advocating. The quality of

す。それはそれで一つのやり方ではあろうかと思いますが。

企業の利益追求というモチベーションは強いものがあって、これが社会の問題を引き起こしていると考えられることが多い。しかし、これを使ってソーシャルデザインを評価し、企業が提案するソーシャルデザインを評価して擦り合わせて未来を決めていく、そういうやり方というのもあるのではないかと考えます。今日のテーマの副題にある「これからのソーシャルデザイン」には企業の利益追求のモチベーションをうまく使っていくという方法もあるのではないか、というのが私の提案です。

伊坂　今回、テーマを「榮久庵憲司で切るソーシャルデザイン」としまして、皆さんに榮久庵憲司というメスを使っていただいたのですが、そのメスが化け物のようなメスで、いろいろな切り方が出てきて、それぞれのオピニオンが広がり過ぎたのではないかなと思います。

天内さんから榮久庵が主宰したGKと山口文象が主宰したRIAの比較を通しながら、芸術と社会の関係の中でデザインにおける匿名性の話とか、最近の話でいくとデザインのターゲットというのがまちとか地域とか非常に限定的になってきているというお話がありました。

森田さんからは、近代の理性というものがある種行き詰る中で、榮久庵さんがよく言っていた「こころ」に通じる「感性」というものを改めて見つめ直すという提案がありました。とりわけ、西洋的理性というものが日本に押し寄せて、それをうまく醸造してきた日本の中で、感性、こころといったものをもういっぺん見直す。その手法としてデザインがあるのではないか。その具体例としてパブリックデザインを秩序と個性といった概念を使いながら説明いただきました。

山田さんからは榮久庵憲司というメスを「真剣」として切っていただきました。榮久庵さんがいうところの人の一生の座・歩・臥を生きた彼の彼岸への旅立ちの話し。また非常に複雑化した国際社会をつくっており、その中で生きていくためには、全ての人に平等にそれぞれに世界があるという認識がいま必要な作法ではないか。そのためには他者へのイマジネーション、社会そのものに対するイマジネーションが肝要ということを言われました。

車戸さんからは、巨大開発に対する環境問題といったような概念に対して双方を両立させる企業利益を、榮久庵さんをはじめこの会が標榜するソーシャルデザインと捉えて追求していくという視点が出されたと思います。

各発言者に共通したキーワードで、割と対立的なキーワードが出されています。榮久庵さんもよくそういう手法をとっていました。複雑なる単純とか、スモール バット パワフルとか、二つの対立概念をうまくまとめあげて、そこに次のイメージをつくっていくということをされていました。これからソーシャルデザイン課題を見つめていく上でのそういった切り方なんかもあると思います。

天内大樹（あまない　だいき）
静岡文化芸術大学デザイン学部講師（デザイン史）
1980年東京生まれ、東京大学大学院（美学芸術学）修了、博士（文学）。博士論文で戦間期日本の建築運動を扱う。共著書に『ディスポジション』共訳に『言葉と建築』他。

森田昌嗣（もりた　よしつぐ）
九州大学大学院芸術工学研究院教授・副研究院長、九州大学感性融合デザインセンター長
東京藝術大学大学院修士課程修了。GK設計環境設計部長を経て現職。東京都の銀座・晴海通り、西新宿地区、福岡市のJR博多駅博多口駅前広場などのパブリックデザインでグッドデザイン賞など受賞。

山田晃三（やまだ　こうぞう）
株式会社GKデザイン機構代表取締役社長
愛知県立芸術大学美術学部卒業後、GKインダストリアルデザイン研究所入所。マツダとGKの合弁によるデザイン総研広島代表取締役を経て現在に至る。日本インダストリアルデザイナー協会理事、日本グッドデザイン賞審査委員。

車戸城二（くるまど　じょうじ）
株式会社竹中工務店執行役員
早稲田大学、カリフォルニア大学パークレー校、コロンビア大学各大学院卒業。現在株式会社竹中工務店執行役員。パシフィックセンチュリープレース丸の内、第一生命大井新事業所でBCS賞、代沢レジデンスで東京建築賞都知事賞、その他グッドデザイン賞、中部建築賞、千葉県景観賞、神奈川県地区コンクール等。

social design may affect the competitive capability of our society as a whole. Some people may say that they do not like to compete with others, but, all corporations are exposed to competition anyway. If they do not think that the quality of their social design is connected with the value of the company, they should be prepared to accept whatever situation results after facing defeat in competition.
Business corporations are, by nature, strongly profit-motivated. We can determine the future of social design by evaluating the social designs proposed by corporations today.

ISAKA: The themes presented by speakers seem to be too broad. Amanai discussed anonymity in design. He also said that the targets of design are being narrowed to towns or districts.
Morita said that Japanese people fermented rationalism conveyed from the west. In the process, the Japanese developed what we call *kansei*, covering sensitivity and aesthetic senses. Design is a method of giving shape to our *kansei*. He mentioned his public designs as examples of ordering and characterizing design elements.
Yamada related the departure of Kenji Ekuan from this world to the other world. He commented that problems in today's complicated international community are caused by a lack of imagination to others and society. He emphasized the need for imagination.
Kurumado proposed that corporate social design can bring forward a compromise between environmental issues and the innate profit-seeking characteristic of corporations who are party to huge real estate development projects.

ディスカッション

藤本清春　道具学会の藤本と言います。天内さんから二つの似た設計組織のデザインの匿名性というお話がありました。榮久庵憲司、あるいは彼が牽引したGKの歴史を踏まえた匿名性ということがモダンデザインの次のステージをつくりあげてきた、というような考えがあるのではないかと思うのですが、その辺をもうちょっと補足していただきたい。

天内大樹　最後、駆け足で説明してしまったところをもう一回辿ります。RIAの方はもともと政治的な思想が背景にあって、匿名で実現する芸術というところに山口自身が賭けていたところがあった。GKの方は、榮久庵さんはいわば晩年の数年間のお話を伺ったぐらいですけども、必ずしも政治的に強い立場をお持ちの方ではないようにお見受けしました。ですから、RIAが目指した匿名性のあり方とGKが目指した匿名性のあり方というのは、多分背景にあるものが違うんだろうなというふうに考えます。ただし、どちらも目指していたものは大量生産の時代にあたって組織で解決する。そのアプローチに関しては同じことが目指されていました。現在、新たに大量生産ではないけれども、組織的な解決が再び注目されていることも、何か組織とか匿名とか社会とかの中で人のつながりでもって地域やまちという集団にアプローチしていこうという考

え方が強くなっている。そしてコンピューターなどを動員して、グループとしてまちや地域に役立っていこうという志向性が生まれたのかと考えます。だからキーワード的に申し上げると新たな「社会主義」が現在見直されていて、その中でRIAが検証されていくしGKも検証されるべきだと考えています。

藤本　「榮久庵憲司で切る」で「ソーシャルデザイン」と掛けた、そういう意味での匿名性の反対には記名性がある、個性があって一つのある意味では近世から近代にきたものすごい人間の個性と集団が持っている人類の個性というものが花開いた20世紀だと思います。今、ソーシャルデザインあるいはホロデザインというかたちでこれから日本デザイン機構がいくときに、21世紀になってすでに15年経ってセカンドディケードにきているのに、まだ20世紀の惰性というか慣性、成り行きで微分したり積分したりしているようなところできたようなところがあるのではないか。ソーシャルデザインでどう次のステージにいくのかと考えたときに、森田さんのパブリックデザインとか、いくつか皆さんのお話にあったところの一種近代デザインのアノニマスな部分が、ソーシャリティとかモノの民主化といわれたデモクラシーという20世紀の真ん中で日本に花開いたものの関連性でいろいろなものが解けないかなと思いましたので質問させていただきました。

鳥越けい子　サウンドスケープデザインをしております。車戸さんのプレゼンテーションの内容と「榮久庵憲司で切る」というテーマとのつながりをもう一度ご説明していただけますか。

車戸城二　ソーシャルデザインという概念は、最初に伊坂さんが出された榮久庵さんのいうところの「運動・事業・学問」、その「運動」にかなり符合していると思います。CSRというのは、ある種の運動です。そしてその運動によって事業が成り立つのではないか、あるいは事業をテコに運動をドライブさせるのではないか。そういうことが分かってくること、それは学問ということかもしれません。学問によって得た知見が、これから先の

Discussion

Kiyoharu FUJIMOTO: In his comparison of the two design offices, Amanai referred to anonymity in design. I think that the anonymity promoted by Ekuan and GK has created a new stage in modern design, would you elaborate on this point?

Daiki AMANAI: For RIA, Yamaguchi had his political ideology, and because of this, he chose to present his architectural work anonymously. Ekuan was not politically oriented. In that regard, the two offices have different backgrounds in seeking anonymity in design. Both tried to find design solutions as organizations in the age of mass production. We are no longer living in the age of mass production, but presenting organizational solutions is noted again. Designers today tend to approach communities or towns through their human networks, and want to serve them as a group. I feel that a new kind of "socialism" is emerging, and that the anonymity of both RIA and GK should be reviewed from this perspective.

FUJIMOTO: In contrast to anonymity, the definitive characteristics of individual designers or groups were valued in the 20th century. When we proceed to the next stage of design with social design, the discussion on public design by Morita and the collaboration of anonymous designers in the creation of modern designs as elaborated upon by other speakers may give us helpful hints.
Keiko TORIGOE: I would like to know how Kurumado relates with Kenji Ekuan's viewpoint.

Joji KURUMADO: Social design corresponds with the "movement" in the cycle of "movement, project (business) and academic study"

社会に対する貢献を果たせるのではないか。そのあたり、私は過去のどちらかと榮久庵さんのやられたことを分析しているのではなくて、それを使ってどういう未来が描けるかというような立場でお話しさせていただいた、ということです。

鳥越　それでは、おっしゃった内容については「運動・事業・学問」という原理で回すというところで、榮久庵憲司でと言ったこととつながるということですね。

車戸　そうです。だから、例えば不動産開発ビジネスというところで、私は単に不動産開発ビジネスの話をしようと思ったのではなくて、デザインの全体性、水野先生がおっしゃったホロデザイン、社会の問題を解決するための概念、そういったものが具体的に我々の身近でどのように使えるのか、価値を発生させることができるのか、ということを事例をもって私自身が感じていることをご紹介したということになります。

鳥越　分かりました。

犬養智子　今日のテーマが「榮久庵憲司で切る」ということですね。ですから私が一番心を打たれたのは山田さんのお話でした。

榮久庵さんの一番の特徴というのが仏教的な言葉を使いながら、今の世界に一番大事なエコロジーのことを語っていたことだと思うのですね。万物に心あり、万物に世界あり。それだと思うのです。コンパッソ・ドーロの受賞のあとで、パレスホテルでパーティをやったときに、彼が書いた『道具和讃』を開いて見せた。あれは彼の真骨頂だと思います。今の世界に何が大事かと言ったら、結局人間が自分のことだけ考えて生きていたら絶対にダメだということです。それを彼はいつの場合にも言っていたとい

う思いがあるのです。ですから、その辺にもうちょっと今日は触れていいのではないかなと思うのですが。

結論に飛んじゃうみたいですが一つの提案として先に申し上げます。考える素材としてお出ししますが、榮久庵さんは足が不自由になり車椅子でしたね。そして、緑が好きでネクタイは緑、ホイールチェアも緑にしていた、ステッキも緑にしていた。私は彼の心を継いだソーシャルデザイン、ホロデザインを考えるならば、これからの超高齢社会で、あらゆる人がお金があってもなくても最後まで元気で生きていけることを考える、デザインをするのがデザイナー、そしてそれを要求をするのが私たち市民の役目なんじゃないかと思うのです。

それで、簡単に例を申し上げますとホイールチェア。あれをもっと使いよくしないとダメです。まず、掛け心地が悪い。夜、あれでまちへ出てくる人がいる。実はこの間、四谷の交差点で本当に危ないと思った。雨が降っていて暗くなっていた。そうしたら、ほとんど見えないのです。LED がある時代なんだからライトを点けたらいい。それから、ホーンをつけたらいい。そして、もっと背を高くしたらいい。ホイールにライトが点くようにしたらいい。そういうことも何にもしない、この高齢社会というのは何なのかということ。

それから、もう一つはデザイナーというのは最後まで人間がきちんと生きられるようにしなければならない。超高齢社会になってヨボヨボになって寝たきりになったら何の意味もない。それはこれからの私たちの運命ですから、それを今から変えなくちゃいけないんですね。

それで、そのためにはコンピューターをもっとよくしなければいけない。そのコンピューターにも問題がある。3年くらいで古くなってしまうから捨てなきゃならない。ゴミになる。プリンターもゴミになる。ゴミをつくりだす社会の中で生きている。ですから、その中でエコロジーを考えなきゃいけない。コンピューターにはいろいろな機能があって、目の見えない人、耳の聞こえない人、手指のない人、そういうのを助ける機能

---

which Ekuan discussed. Corporate social responsibility is a certain kind of movement. Business activities can be driven by the movement, or the movement can be driven by business activities. Understanding these relations may become an academic study. Knowledge obtained through studies may contribute to the future society. I spoke about the business of real estate development, not simply to explain the business but to introduce my thought on how to apply the concept of design as a whole, or holo design, to solve social problems, and to create a new value system.

Tomoko INUKAI: What was outstanding about Ekuan was that he was talking about ecology using Buddhist terms. Everything has its mind and everything has its world. What is important is that humans should keep this in mind and not live only thinking about human life.

In his latter days, Ekuan used a wheelchair. He liked green, so his wheelchair and cane were green. As Japan is a super aged society, designers should consider that all elderly persons can live vigorously until their final days regardless of their economic conditions. We as users should demand product designs that help us live comfortably and vigorously. For example, wheelchairs should be much improved. First of all, they are not comfortable to sit on. It is dangerous to move in a wheelchair at night and on rainy days. Persons in wheelchair can hardly be seen from drivers in motorcars. An LED light can be installed. A horn can be attached. The back of the seat can be heightened. But no such ingenious device has been applied to them in this aged society.
For elderly people to live actively, computers should be more elderly-friendly. The computer has so many functions, and those who have difficulties in seeing, hearing and using fingers are able

がちゃんと入っているんですね。私もそれを使ってメールを出してみたんだけれども、音声入力で原稿もできるしメールもできる。榮久庵さんもそうですけど、秘書がいる人は秘書がやっちゃうからダメなんですけども、亡くなる前、2014年の夏にアップルストアにご一緒して、MacBook Pro Retinaという高機能の小さいラップトップを買わせちゃったんです。それで彼は何度か行って教わっていらしたけれども、結局、秘書がいる人って自分で操作しないのね。車椅子と、それからどんなに年をとっても使いやすいコンピューター。この二つをデザインしていかなければいけないんじゃないかな、というのが私の素人なりの考えなんですが、いかがでしょう。

山田晃三　「榮久庵憲司で切る」という題をいただいたときに、これで「何を切るんだ」と思いました。そこで僕はソーシャルデザインというのを切ってみたらどうかな、と思ったのです。なぜかと言いますと、社会のためのデザインと言ったら誰も反対はしない。インダストリアルデザインは産業のためのデザインと言うと「もうそんな時代じゃない」とか言われる。それからすればソーシャルデザインなんて誰も反対しないから、それをやっていますと言ったらみんな大変喜んで周りから人が集まってくる。でもそんな簡単なものじゃないだろう、と思っています。ソーシャル、社会というのは人の社会ですね。集団の人の話ですね。だけど、人の死を前にして、一人の人間として自分はどうやって生きていくかということを真剣に考えると、一人（自分自身）というものと、社会（集団）という二つがあるような気がして、この二つにはとっても苦しい「矛盾」がいつもつきまとっていると思います。

ソーシャルデザインは耳障りがいいのだけど、でも自分という一人で考えることと、社会がこうだと言っているというところに矛盾が生じることが多い。近年、ソーシャルセンタード（社会中心）デザインということが言われます。それに対してヒューマンセンタードデザインということもいわれています。一方でネイチャーセンタードデザイン、これはエコロジーデザイン。僕は、この三つは一見個々にはうまく動いているようで、絶対にぶつかる存在だと思っているのです。私たちはこのソーシャルデザインをやります、と言うけれども、実はもっと大きなところでデザインを捉えるべきではないか。そこで僕は「世界」という言葉を使ったのです。社会ではなくて。

「世界はひとつではない」というふうに思った。社会というのは今日話があったように、とても人間のリアルな世界です。建築だったり、駅前広場だったり。でも世界というのは、本当に幻想の世界です。思考におけるイリュージョンです。だけど人は、そのイリュージョンなくしては生きていけないと思う。僕は、榮久庵憲司はそう考えていたと思います。そのイリュージョンをどのように組み立てて豊かさを発見するかというところに、実はもう少し、デザインの焦点を定めてもいいのではないか、という気がする。水野会長がデザインの定義を広げましょうと言ったけど、ソーシャルという意味をもう一度日本デザイン機構で議論して、ソーシャルの定義を広げてみてもいいのではないかなと思っています。

水野誠一　今の山田さんの意見は重要だと思います。ソーシャルデザインとかソーシャルマーケティングという概念や言葉自体が非常に曖昧だからです。ですから、社会をデザインするということなのか、あるいは社会の中で評価されるモノやコトをデザインしていくことなのか、その都度明確に定義しなければいけないと思います。

ただ、重要なことは、ソーシャルマーケティングが出てきた背景には、マーケティングという考え方が、20世紀の半ばくらいまでは、経済的に成り立つか否かということだけで評価されてきたという実態があります。しかし、環境問題や資源問題というさまざまな矛盾が生まれてきた。そこでもう一つ別の要素として「社会との関係論」を考えるべきだ、といって出てきたのがソーシャルマーケティングなんですね。

「社会との関係論」ということになると、単に経済や市場との関係というよりも一次元高位に位置してくる。つまり、はるかに難易度が高まっている考え方であることは確かです。

---

to communicate with others using computers. We can even write a manuscript by using speech recognition. But the problem is that computers become outdated in a very short period. They must be replaced and old ones become waste, despite the fact that we must be more mindful of the ecology. So my hope is that designers will design better wheelchairs and computers.

Kozo YAMADA: Some may say that industrial design is outmoded, but no one will contest Social Design. But when I consider how I should live my life, I feel that there are severe contradictions between what I consider to be right and what society says is right. Today, we often talk about society-centered design, human-centered design and nature-centered design (ecology design). These designs are working well independently, but I fear that they would definitely clash each other someday. We have been considering social design, but I feel we should consider design from a broader perspective, so, I prefer using the word "world." "Society" is a realistic entity, while the term "world" is more illusionary. The "world" is an illusion in our thinking. I feel that we should focus our design on how to discover richness by constructing an illusionary world. Anyway, we should discuss the meaning of social design more deeply and redefine it.

Seiichi MIZUNO: Indeed, the concept or meaning of social design or social marketing is ambiguous. Every time we discuss it, we must define whether it is to design a society, or design material and nonmaterial things that will be highly evaluated in society.
Until the middle of the 20th century, "marketing" meant if one business would be economically feasible or not, but as environmental problems and resource problems became apparent, it

先ほど車戸さんからおっしゃっていただいた「ホロデザイン」という考え方は、ソーシャルな問題解決をしていくためには、今までのマーケティング手法では無理だというところから出てきています。地球環境というマクロな視点から、人間の体内の細胞というようなミクロの視点までをどう融合させ、その関係を解き明かしていったらいいのか、というような非常に高度な考え方が必要とされてきます。ですから、その手法論の中においても、今までのマーケティングとかデザインの手法だけではどうにも対応しきれなくなってきている。

このことを具体的な事例でお話してみましょう。犬養さんがおっしゃっていたアップルをそういう視点で見ていったときに、実は全然違う評価の会社であることが見えてきます。問題も多々あるけど、マイクロソフトという会社とは、ともかく企業文化の次元が違うということに気づくんですね。今までのマネジリアルマーケティング、つまり経済的な視点や市場性から見て、どっちが勝者なのかと問われれば、勝者は明らかにマイクロソフトでした。ただそれは20世紀までの評価で、21世紀的になってアップルの持っているソーシャルな視点やホロニックな視点を理解したときに、実は非常に次元の高いマーケティングをしていることに気づくわけです。その辺を考えた上でソーシャルデザインを一度解き明かしてみる必要があるのではないかと思います。山田さんのおっしゃっている通り、今、ソーシャルネットワークと言えば泣く子も黙る、ソーシャルマーケティングと言えばみんな恐れ入るというところに甘えていたら、ソーシャルデザインも今に陳腐なものになってしまうという危機感を私も持っています。

伊坂正人　今日の副題に出ている「ソーシャルデザインの未来」ということに対して、榮久庵憲司というメスでどういう切り口が見えてくるのかという話の中で、水野さんからソーシャル、社会の見方というものが提示されたわけです。社会というのは基本的には人間集団です。人間集団というのは二人から始まる。そうするとその二人の間に何が出てくるのかというようなところが、ものごとを単純化して見ていく一つの手法かと思います。

森田昌嗣　私がGKに入社したのは1979年ですが、そのときにすでにデザインの横断的活動をGKは始めていました。榮久庵会長の意思でもあったかと思いますが、私が入った頃は、いろいろな領域の部門が一堂に会するマンデーギャラリーという場で、活動状況のプレゼンテーションを行って、専門領域を超えてお互いに意見を交換し合うことをしていました。またGKの自主プロジェクトとして、業務以外の現代的な特別なテーマ、例えば「小さなクルマ」というテーマで、都市の交通環境からプロダクト、さらにライフスタイルまでも考えるという、すごく横断的に多方面から取り込むというのをやっていた。このような活動は、たぶん当時の他のデザイン事務所や企業内のデザイン部門では、ほとんどなかったのではないかと思います。建築とか、プロダクト、グラフィック、さらにはエンジニア、社会学、文化人類学など、いろいろな方が相互に同じテーマを考え提案に導いていた。それは、榮久庵憲司会長の遺したとても重要な一つ、現在でのソーシャルデザインの先駆けであったと思います。

1982年にGKは分社化をしました。その頃、榮久庵会長に何故分社化をしたんですかと聞いたことを覚えています。私は今、大学で教育をしていますが、大学も悲しいことに、実社会でのデザインが領域を横断しハードデザインだけでなくソフトデザインが重視されているにもかかわらず、従来の学科別の専門分化での教育に固執しています。まさにGKが50年前に進めていた考え方が今のデザインの業界に必要です。最近は、デザイン分野だけでなく工学や経済学などの諸分野においてデザイン思考の重要性が認識され、国内でも東大や京大、そして九大でも大学の基幹教育の一環として取り入れられています。九州大学の芸術工学部（デザイン学部）の卒業生は、製造業などのデザイン職だけでなく、銀行や商社、インフラ企業などの総合職にも入ります。また、学科の専門の壁を超えて、環境デザインや工業デザインな

---

became necessary to consider marketing in relation to society, hence, the idea of social marketing became popular.
Theories on relations with society imply a higher level of concept than relations with the economy and market. The concept of holonic design emerged from an understanding that the conventional marketing methodology would be unable to solve social problems. We need a high-level concept to cover a macroscopic perspective of the global environment and a microscopic viewpoint such as cells in the human body, and to explain relations among these perspectives.
If you compare Apple Inc. and Microsoft Corp. in detail, you will find that these two companies have different corporate cultures, and they are evaluated quite differently. From the economic perspective and marketability, Microsoft certainly is the winner. But when we understand the social and holonic perspectives that Apple has, we realize that Apple applies very high level marketing. We may need to define social design again taking this example into account.

Yoshitsugu MORITA: When I joined GK in 1979, GK had already begun cross-sectional design activities where staff members of different sections gathered together to report their activities and exchanged views across design genres. They also took up a contemporary subject such as "Small Vehicle," and discussed urban transportation systems, products, lifestyles, architecture, graphics, engineering, sociology, and even anthropology. After exchanging views on a theme, they concluded in a proposal, not only in documents but sometimes as concept models. This working style is an important legacy of Kenji Ekuan, and GK was a herald of what we now call social design.

どの分野からも広告代理店やテレビ局のディレクターやコピーライターなどに進んでいます。いろいろな立場からさまざまな問題の解決、提案を導くというところにデザインの考え方や方法、手法などが期待されていることを実感しています。このような考え方の先達がGKであり、その先見性をさらにソーシャルデザインの観点から次代に向けて発揮していただきたい。ソーシャルデザインの意義と役割が求められている今、GK榮久庵会長の思想に時代が追いついてきたのではないかという気がいたします。

佐々木歳郎　ソーシャルデザインのソーシャルを社会と考えて、社会をデザインするなどという大それたことが日本デザイン機構にできるとは到底思ってはいません。ここで言っているソーシャルというのは、社会との関係性を意識することであったり、視点として社会との関係性というところを見据えるという意味でのソーシャルと考えます。ですから、関係性のデザインを目指すという意味でのソーシャルデザインというふうに

一応定義したいと思います。なぜかというと、社会に出ている解決すべきいろいろな課題というのは、全てそれぞれ社会事象の断片と断片の関係性の中から生まれているからです。その関係性ということを認識した上で、それをどういうかたちで折り合いをつけるか、先ほどの車戸さんのお話のように相反するいろんな要素を前向きなかたちで両立させていくか、あるいは包括していくかというようなかたちでの課題解決がソーシャルデザインと考えたい。ソーシャルというのは、ある意味で言えば非常に物理的でも目的的でもなく、むしろ意識のあり方であるし、ものの見方である。さっきのアップルとマイクロソフトの話で言えば、何が違うのかと言うと社会に対する意識の部分が決定的に違っている。ですから、ソーシャルデザインにとって一番必要な部分というのは、意識の部分ではないかと私としては考えています。

それから皆さんからお話が出ましたし、車戸さんからも出ましたけれども、世の中複雑になってきて、いろいろな事象に対して専門分化してしまうと一つの専門分野ではそういう社会課題に対しての解決はもはや不可能ということもソーシャルデザインの背景にあります。その場合のソーシャルというのは何かと言うと、それぞれそういう気づきを持った人たち同士がつながること、それぞれの知恵を持ち寄ることでしょう。持ち寄る中で何か新しい発想が生まれる、その活動自体がそもそもソーシャルではないか。ですから、そういう意味で日本デザイン機構がこれから目指していくものは、では榮久庵憲司とどこでつながるかと言ったときに、天内さんが言っていたように「弁当箱」です。弁当箱というのは、それぞれ別々の個性をもったいろいろなおかずが一体としてつながったかたちでアウトプットを出しています。そういう全体を俯瞰して認識できるということ、それこそ、榮久庵憲司が遺したことではないでしょうか。ものごとの関係性、あるいは断片同士の関係性、そこに目を向けて見据えることが非常に大切なんだよというふうに伝えているのではないか。それを受け取って今後の日本デザイン機構の活動にしていきたいな、と考えている次第です。

井出亜人　私はデザインの世界の外の世界にいた人間ですが、たまたま若い頃に通産省でデザイン行政を1970年から73年まで担当いたしました。そのときに若き榮久庵さんがやってこられてICSID（International Council of Societies of Industrial Design／国際インダストリアルデザイン団体協議会）の国際デザイン会議をぜひ日本でやりたい、京都デザイン会議というのをやりたいから手伝え、ということを言ってこられました。当時、小池岩太郎先生が座長をやっておられましたデザイン奨励審議会で、ぜひこれをやろうじゃないかということになりました。役所の中で予算を取るのに大変苦労をしましたが、当時、国際会議を日

I am now teaching at a university. It is sad that the university still adheres to conventional specialization when cross-sectional designs are prevalent in real society. But the importance of having a design approach is recognized in engineering and economics, and education on designing is introduced as a part of curriculum. Therefore, I feel that the use of design is expected to solve various problems and draw solutions to the problems in many specialties. I see that Japanese society has finally caught up Ekuan's thought.

Toshiro SASAKI: I would like to define social design as the design of relationships. I say this because problems in society develop in the relationships between different fragments of social phenomena. Social design, to me, is a way to solve them by compromising or embracing contradictory elements.
Another important factor in social design is the designers' consciousness. Apple and Microsoft have different consciousnesses of society.
Behind the need for social design is the concern that current social problems can be hardly solved from a specialized perspective. "Social" in this case will mean that people concerned in a problem gather with their wisdom to find a solution. This activity is "social." I can connect this process to what Ekuan referred to as the "Bento Box" in which a variety of dishes are contained in a box. You need to have an overhead view to recognize a fact, this is what Kenji Ekuan left with us. I would like to accept his message and use it as an activity of the Japan Institute of Design.

Tsugio IDE: I am an outsider in design. As an official in the Ministry of International Trade and Industry (MITI), I was assigned to design administration from 1970 to 1973. Kenji Ekuan visited us

本で開くなんて考えられない時代に榮久庵さんがイニシアチブをとったというのは素晴らしいことでした。それ以来、いろいろな場面場面でおつきあいが続いている。

それから、10年近く前に榮久庵さんが中国のハイアールのデザインを指導し、さらに合弁会社をつくってハイアールの製品デザイン開発をした。そのときに中国政府から表彰をされたと聞きました。そのときの榮久庵さんの感想が日経新聞の文化欄に出ました。何と言ったかと言うと「私はね、鑑真和上の恩顧にこたえたのです」と。私は、榮久庵さんはお坊さんだということは知っていたんですが凄いことを言うな、と思いました。たまたま日中関係が悪い時期で、私たちが中国との間で大きな国際会議をやろうと考えていたものですから、ただちに電話をしてぜひとも鑑真和上の恩顧にこたえた話をやっていただきたいと、そんなことを話した記憶があります。

デザイン行政についた当初、デザインというのはわかりにくくてデザインと建築はどこが違うのかというような時代でした。今、グッドデザイン賞の審査員長を建築家の方がやっておられるということで、この二つは同根であったものがますます同根になりつつあるなという感じがいたしました。フランスのポンピドゥー・センターをつくったイタリアの建築家レンゾ・ピアノさんと安藤忠雄さんの対談をNHKでやっていまして、そのときの最後にピアノさんが「デザインというのは哲学なんだ」ということを言われていた。榮久庵さんのいろいろな場面場面もそういう考え方がほとばしっているのかな、と感じています。

それからもう一つ。榮久庵さんは、決して欧米だけでなくて日本のこと、アジアのことを、あるいは東洋のことを考えていた。岡倉天心も相当そういうことを深く考えていた。柳宗悦さんにもそういうものが非常にある。現在、欧米主導の考え方よりも、むしろ欧米も大事だけど東洋にもあるんだということをますます我々はPRしていかなければならないんじゃないかな、という気がしています。榮久庵さんもそういう部分がいろいろな場面で出ていますけれども、もっとこういう人たち、アジアの人たちを再認識すべきではないかなという感じがしています。

それから、先ほども話が出たように経済発展とか近代化ということだけに日本の発展が進んできたということがあります。司馬遼太郎の『坂の上の雲』には日本をいかに近代化させるか、強くするかということが書かれています。それから戦後は、要するに経済をいかに強くするかというので日本はずっと進んできた。このことが終わって次のパラダイムを考えなきゃならないという時代に我々はきているんじゃないかと思っています。そういう中で榮久庵さんがいろいろ言われたことにヒントを見ることができるのではないかと思っております。

最後に、日本に大学をはじめ社会というのはテクノクラート優先主義できている。教育も経済学部とか法学部とかそういうものに就職が有利に働いて、文学部とか哲学部とかそういうものは、どちらかというと企業に関係がないという感じで進んできた。さっき、森田さんが言われて「いや、そうじゃない。大学から企業も銀行もそういう人を取るようになった」というのは新しい、好ましい現象だと思いますけれども、大学の中の構成というのはインターディシプリナリーと言われながら、非常に専門領域に特化してしまっている。これをつなぐには、やはりデザインの考え方というのが非常に有効であって、そういう発信をするべきではないかなと思います。

私は日本大学のビジネススクールでCSRをずっとやってまいりました。最近、アメリカのマイケル・ポーターという、これは世界的に有名な経営学者ですけれども、要するに経営学とは何かという問いに対して社会の課題と企業の事業とを一体化させることがCSRなんだと言っています。先ほど来のソーシャルデザインも非常に関係があるのかなという感じがいたします。かつてはデザイ

---

and said that his group wanted to host an international conference in Kyoto under the International Council of Societies of Industrial Design (ICSID) and requested MITI's financial subsidy. We had a hard time allocating a subsidy, but I was amazed by his initiative in hosting an international conference in Japan at that time.
About a decade later, Ekuan led the design staff in Haier Group in China, and established a joint venture to help with the designing of its products. The Chinese government conferred a medal on him for his merits. In reply to this honor Ekuan said, "I just wanted to return the favor to Rev. Jianzhen (who came to Japan to introduce the precepts of Buddhism in the middle of 8th century on his fifth voyage)." At that time, China-Japan relations were not favorable, and we planned to hold a major conference with the Chinese government. So, I called Ekuan and asked him to give a speech at the conference about Rev. Jianzhen.

In a TV program in which Renzo Piano, an architect from Italy, and Tadao Ando had a talk, Piano said, "design is a philosophy." I recall many scenes that Ekuan was thinking in the same way. Another impression about Ekuan is that he always had Japan, Asia or the Orient in his mind in addition to Europe and America. We should pay more attention to Asia to lead the world.
I am now specializing in CSR at the business school in a university. Michael Porter, a famous American scholar in business administration defines CSR as the integration of social problems and corporate business. I feel social design is closely related with CSR. The world of design was small in the past, and it has been widened but we need to broaden it further.

Takateru NAKAGAWA: I have hearing aids on both ears. I cannot associate with society without them. However, with these devices,

ンの世界が非常に狭かったわけですが、今は可能性としてますます広がっているし、さらに広げるべきではないでしょうか。

中川貴照　個人的な話で申し訳ないんですけど、私は今、補聴器をつけています。この補聴器が両耳に入っています。先ほどからおっしゃっているようなソーシャルデザイン、社会との関係性で、私は今、この補聴器がないと集団としての個人は成り立ちません。ちょうどいい機会だと思って発言させていただきたい。実はこれをつけてもウォークマンのように聞こえるんですね。生身の声では聞こえない。もっと良くならないか。普段、駅で歩いていると自動ドアがいっぱ

いあります。そうすると高周波でハウリングをされるような音も鳴る。そういう不便なこともあったりする。一番ショックだったのは、これは5年前につけたのだけど、片方一個18万円から20万円くらいします。タイプでいうと三段階の三番目くらいです。一番目は50万円くらいする。両耳に入れると100万円くらいです。私は障害者の手帳を持っているので9割は国から保障されています。ヨーロッパ製で日本製じゃない。でも日本にはつくる技術はあると思う。

日本には、潜在的に難聴になる可能性のある方は二千万人と言われています。それを9割補償するとものすごい金額になると思う。ヨーロッパでつくるか日本でつくるかということも含めて、社会的な大きな関係性の問題だと思います。

個人的なこういうお話というのは、こういう場でなかなか発言することができなかったのであえて発言させていただきました。「ソーシャルデザインの未来を拓く」というところでは、個人的な関係性の中で社会とつながる必要性というのは、今後マイノリティとしても、あと私は30年とか40年とか生きていくわけですから、その中で何か一緒にできることですとか役立てるところがあればいいなと思って発言させていただきました。

大倉冨美雄　ソーシャルという話が出ていましたけれども、今のこの社会、特に先進国と言われている日本をはじめヨーロッパも含めて、この百数十年の間に非常に合理主義的なものの考え方の中に埋没してきた。そして今、大きな反省点になっているなということが、皆さんの具体的な例をもった話の中から実感できました。

そういう中で、現代の社会の中における大きな問題というのが、如何にすごいことかという具体例を車戸さんがお話

をされたように感じました。いわゆる産業構造の中におけるトップ企業が持っている問題にはものすごいものがあって、そのことが具体例として示された。榮久庵流に言えば「運動・事業・学問」ということの中に出てくるでしょうけども、その中によく見えてきたのが心の問題。そこに今、皆さんの意識が辿り着いてきたと思います。それをソーシャルデザインの問題として捉えるようになってきたというふう理解しました。

曽根靖史　天内さんが発表したGKのスタートメンバーの四人の名前はもっと前、GKができる前のお話でした。大学での小池先生とその四人です。GKってすごいなと、学問になっちゃったんだなとびっくりしました。絵を描いてお金に

people's voices do not sound like actual voices. Rather, they sound like they are coming through a Walkman. Automatic doors abound in cities. When I am near them, I hear howling in my ears due to the high frequency used for the doors. The greatest shock was the price. When I bought them five years ago, one aid cost 180,000 to 200,000 yen. It is a third class product. The first class hearing aid cost 500,000 yen per one, and 1 million yen for both ears. I am a holder of a handicapped person's passbook, so 90 percent of the cost is paid by the government. They are not Japanese products but are imported from Europe. I am sure that Japan has the technology to produce them.
It is said that more than 20 million people will potentially suffer from hearing difficulties in years to come. If the government were to pay 90 percent of the prices, that would be an enormous amount of money. So, it is a great social problem to provide hearing aids to people with hearing difficulties, and to consider whether Japan should develop and manufacture their own devices.

Fumio OKURA: Japan and other industrialized countries have been immersed in the rationalist way of thinking. And now, concerned people are bemoaning that tendency. I realized this while listening to your presentations. As Kurumado mentioned, top businesses have serious problems to address. And I see the problem of consciousness or mindset. I understand that this problem has come to be considered a part of social design.
Yasumi SONE: I was among the starting members of GK, and today, I am surprised to know that GK has grown to be engaged even in academic studies. In the initial period, we were told that we could earn money by drawing pictures. So, I am amazed that GK has grown to what it is today. As the fields of design have expanded, I

なるというお話が実は学問だというのはたいへんなことだと思うんですね。それから、一つ一つの事例を拝聴しまして、そうだったのか、すごい育ち方をしたな、素晴らしいことだなあと思いました。いろいろなジャンルのデザインが増えた現在、社会の現象もどんどん取り込みながら、これからもこの会がますます発展をして欲しいと感じました。

曽根眞佐子　私もGKの二期生のメンバーでございまして、GKで育てられたという感じがします。もちろん榮久庵さんは偉大なる方ですけれども、学生を集めてスタートした小池先生の大きな力があったのだと思います。そして榮久庵さんはとても懐の深い方で、何でも受け入れてくれ、それについてとことんまで追求なさる方でした。榮久庵さんのいろいろな言葉がたくさん出ていましたけれどもこんな言葉もありました。お坊さんのお宅に生まれたということがありまして「一・掃除、二・勤行、三・学問」。それが本当に深く身についている。それだけではなくて、彼はアメリカで小さいときを過ごし、そして留学をし、戦後の日本の成長を一生懸命に考えて、全てのものを大きく捉えながらやってきた。

今日のテーマのソーシャルということなんですけれども、私は榮久庵さんと長いお付き合いの中で、あまりソーシャルというお話は伺っておりません。むしろ道具ということでは本当に散々伺いました。

ソーシャルというのは本当に大きな括りで話されていると思うんですけれども、私たちはものごとをつくり、生む世界に生きている中で、榮久庵さんが何を教えてくれたかというと、犬養さんがおっしゃられましたけれども榮久庵さんの姿を見るとわかってしまう。何故、あのグリーンのステッキを持っているのか、夏になると真っ白なスーツを着るのか。それを一言で言うなら、美しいものを人間は求めなければいけないということを、言葉を通し、お考えを通し、私たちに示してくれたし学んだ気がします。

お弁当の話も出ましたけど、確かに理屈で言えばあれはいろいろな世界のものを一つにまとめて大きな力を表現するということだったと思いますが、あのお弁当で一番感動したのは、お弁当箱の上にそっと置かれた小さな菊の花です。美しいものにこそ真実があるということをいつもおっしゃっておりました。

私は漆で小さな器をつくりまして榮久庵さんにお見せしたら、生まれて初めて榮久庵さんに褒めていただいた。「美しいよ」って。やはり美しいということがいかに大事かということを教わったような気がします。ですから、榮久庵さんでもし私が切るとすれば、榮久庵さんに教わった美に対する思いです。これがやはり社会をつくっていくんじゃないかと思います。たくさんの考え、たくさんの仕事がありますけれど、じゃ何が美しいかとやはりそれは、見て心地がいい、心地のいい人間関係、心地のいい社会関係。美とのつながりも榮久庵さんは最後まで追求され続けたんじゃないかな、と思いました。

天内　まさかご本人がいらっしゃるとは思っていなかったのですが、曽根さんと逆井さんがいらっしゃるということは把握していました。一番最初の、ごくごく初期の、まだ会社になっていない頃のメンバーをここでは挙げさせていただきました。

車戸　ホロデザインとソーシャルデザインの話をさせていただいたので、ちょっと補足します。今、サスティナビリティという言葉があります。サスティナビリティというのは時間ですね。要するにずっと続いていくということですね。ずっと続いていくということを突き詰めていくと、それは百年のことを言うのか、千年のことを言うのか、一万年のことを言うのか、一億年のことを言うのかという話になります。ホロデザインと言ったときも、先ほど水野さんがおっしゃったようにミクロの細胞的なもの

---

hope that the Japan Institute of Design will make further progress taking in various social phenomena.

Masako SONE: I was a second year member of GK, and I feel that I was educated by GK. Kenji Ekuan was a broad-minded person and he pursued his interest thoroughly. Some of his words have been introduced here, and I remember him saying, "1. Cleaning, 2. Service, and 3. Study" as he was born in a temple. He spent a number of years in the United States as a child, and studied there later. He devotedly considered the postwar growth of Japan. He grasped everything from a broad perspective. What he taught me was to search for beauty. Why did he hold a green cane? And why did he wear a white suit in summer. Not only in his words, but he practiced the pursuit of beauty in his life. Some referred to the Bento Box. He might mean to express various elements in a box to express great power. What impressed me most about the Bento Box was that a small chrysanthemum flower was placed on the dark-colored lacquered lid. It was so beautiful. I learned the importance of pursuing beauty. I think Kenji Ekuan continued to pursue beauty in terms of something pleasant to look at and enjoying pleasant human relations.

KURUMADO: I would like to supplement my presentation. Sustainability is often talked about now. Sustainability is a temporal continuation, be it 100 years, 1000 years or 10,000 years. Holo design suggests a dimensional expanse from microscopic cells to the universe, and it is also related to time. Both expand eternally, so we need to set an immediate target when we design something.
I wondered what should I speak to please Kenji Ekuan, and decided

から宇宙までというようなスケールは実は時間にも関係しています。どの射程で捉えてもそれをサスティナビリティという概念で置き換えてみると問題は果てしなく広がっていきます。ホロデザイン、デザインの全体性ということを考えても、それは同じところにいくんじゃないかな。ですから、とりあえずのターゲットが要る。

最初の質問に戻ります。何が榮久庵憲司かという話ですが、私は、ここで何を話したら先生が一番喜ばれるかなと思ったのです。そのときに、先生がこうだったねという話を聞いて先生は喜ばれるかな、それよりもこれからどうしましょうかという話をした方がきっと喜ばれるかな、と。これは私の勝手な考えですが。ちょっと思ってそういうふうなまとめ方をさせていただきました。

伊坂　今回テーマとして「榮久庵憲司」というメスでソーシャルデザインをさまざまに切り刻んでいただいたわけです。発言の途中でも言いましたけれども、我々が今生きている社会というのは、二人以上の人間が暮らす社会です。二人が揃うことでさまざまな問題が出てくるはずなんです。その問題を突き詰めて解決していくのも二人以上の人間が必要になってくる。集団、組織になってくるのではないか。それも社会としてのデザインになってくる。我々が標榜するソーシャルデザインというのはそういう社会が持つ課題を社会的に解決していくということだと思います。

榮久庵さんがそういうことの一つの解決法としてよくやるのが組織をつくることなんですね。彼が世界デザイン機構という組織づくりに動いた時期もありました。その日本の受け皿みたいなかたちでこの会がイメージとしてあったわけですけれども、こういう捉え方をしていく限り課題というのは常に出てくる。それを社会としてある組織として解決していかなければならないというのも、今お話にあったように永遠のテーマだと思っています。

天内さんがはじめに政治の話をしたのですが、政治というのは党派の話だけではないと思うんですね。社会的に動いていくからには政治力が当然必要になってくる。そういうものも含めて我々の会の活力にしていけたらと思います。今日は会員の方以外もたくさんお見えになっています。ぜひともこの会に参画していろいろご意見なり、一緒に活動をしていただければと思っています。今日はどうもありがとうございました。

編集後記

本号特集のフォーラムから１年を経過してしまいました。このフォーラムは、昨年逝去された榮久庵憲司前会長のデザイン観を通して次代のテーマを探る会でした。

この１年、改めてデザインの根底を考えなおさなければならない出来事が多発しました。関東・東北豪雨による鬼怒川決壊や直近の熊本地震は、自然に対する人工の脆さを露呈させました。東京五輪をめぐるデザイン問題は「クリエイティビティ」とは何かを突きつけました。

榮久庵憲司氏は事を成すときに「そもそも論」から入る人でした。当会が標榜しているソーシャルデザインには、そうした「そもそも論」が必要です。一方でデザインとは、日常の問題を発掘し、課題解決する行為でもあります。そこでは軽快なフットワークが求められます。この両極でデザインする「今」と考えます。

（伊坂正人）

VOICE OF DESIGN　VOL. 22-1
2016 年 5 月 18 日発行
発行人／水野誠一
編集委員／鳥越けい子（委員長）.
薄井滋.　天内大樹.　矢後真由美.
西山誠.　南條あゆみ（事務局）
翻訳／林千根
発行所／日本デザイン機構事務局　〒 171-0033
東京都豊島区高田 3-30-14 山愛ビル 2F
印刷所／株式会社高山

VOICE OF DESIGN Vol.22-1
Issued: May. 18. 2016
Published by Japan Institute of Design
3-30-14 Takada,Toshima-ku,Tokyo 171-0033 Japan
Phone: 81-3-5958-2155　Fax: 81-3-5958-2156
Publisher: Seiichi MIZUNO
Chief Editor: Keiko TORIGOE / Translator: Chine HAYASHI
Printed by Takayama inc.
日本デザイン機構は法人会員 株式会社ＧＫデザイン機構、ヤマハ発動機株式会社と個人会員によって支えられています。

that I should discuss what we should do from now on, instead of just recalling episodes about him.

ISAKA: More than two people are needed to solve problems in society. The social design that we intend to pursue at JD is the act of solving social problems with social efforts. One way that Ekuan took to solve problems socially was to establish an organization. Problems continue to occur, and it is an eternal theme for us as an organization to address upcoming problems.
Amanai referred to political power. This does not mean having political ideologies, but we need political power to be active in society. I hope we can incorporate political power as our energy source.

Editor´s Note

One year has passed since the Forum featured in this issue took place.
In this one year's time, several things have occurred which have caused us to reconsider the fundamentals of design. For social design, we need to view a social problem from a fundamental point of view.
In contrast to social design, we need to discover a problem in everyday life and find a solution to it to improve our living. For this, we need to have light footwork. Now is the time when designers must work to meet these extreme ends. (Masato Isaka)